

ある吳王固威の將となつて西の方、強楚を破り、北の方、齊魯を成し、名を諸侯に顯した。その著述に孫子十三篇がある。

**そんじやう** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんじよ** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

そんじやう だいきやうし

邊の意にいひ、從つて「そんじようれ」などといふやうになつたのである。

**そんしん** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。  
\***そんしん** 孫儀の著述に孫子十三篇がある。

**そんぞ** 何と御頭痛の氣味あつて、そんぞと寒氣などはまるらぬか(冷泉節)

**そんつぐ** 「そんを見よ。」

**そんなりや** そんなりやおれがかか様といひ、だきつけば(舟渡與作)

**ぞんぶり** 田をばぞんぶりぞ(女護島)

水の中などに入る時の水音。水中を歩く時の水音。平家女護島のこのあたりの文は、萬歳の田植唄に據つたものである。「たうま」及び「植をい植をいき女、めでたき君云云」の條を見よ。

大一大萬大吉 風折烏帽子・立烏帽

た

子、大一大萬大吉・白一文字黒一文字(五人兄弟) 大一大萬大吉と我を折烏帽子・立烏帽子(會稽山) 紋所名。

大壽

(觀所鑑武倉録)

**だいいうん** 魚の中にも鱈などは大うんの物、かれて無用と申した(今宮)

**だいえ** 柄子の御身に大衣を着し、緋の袂に杵香爐を燦らせ(聖徳太子)

**だいかいどうじ** 我日の本に昔より住馴れたれば、住吉の大きい童子と申す者(國性爺)

「大海童子」住吉の神の名。頗性野群談(享保二年刊)卷之五に、「我此浦に昔より住馴れたれば、住吉の大海童子と申す者。」

**だいがさ** 七つ道具の臺笠・立傘。馬印(粟川渡鼓)

**だいがしら** のまひ つねづね大頭の舞を好き(反魂香)

**だいがま** 大鎌の犬めらに懲り果てて死ぬる身を言はば、面而自害とも、心中の外の心中ぞや(卯月潤色)

**だいきやうし** 梅の曆の根本大經師以春とて袴いらすの長羽織(大經師)

「大經師」現今は表具屋と同義語にいへども、昔は朝廷の御用の工であつて經卷佛畫を裝潢した。その長は新羅の發行權を有し、毎年十二月初めに來年の新曆を弘めたのである。雍州府志(貞享三年刊)土庫門下、服飾部に、

「凡摺經卷、或製褙袂、並畫畫之類横卷之者、俗謂卷物悉製之、是稱經師屋。其內首長内匠一人謂大經師、每年受經都幸德氏賀茂氏所考之新編、豫行而予世、今事謂大經師屋。澤橋雜談(正徳三年刊)に「初麿。祭裏は冬十一月朔日、南都幸德氏其來年六月まで考へたる麿を大間に遣進す、又六月朔日に十二月迄考へて奏するよし也、民間にも右幸徳氏賀茂氏考ふる所の新編十一月朔日に進奏するの便、大經師所幸徳などより申請て、是を版行して世にひろむ、是を大經師屋と稱す。」

太極の劍無極の劍(吉岡榮)  
「太極」不極無極吉岡憲法流の劍道上の名。易繫辭傳に「易有太極、是生三陽儀」と見え、宋史・周茂叔の中に「自無極、而爲太極」見えてゐる。蓋しこれ等より附け九劍法名であらう。

たいきんりきん 赤白二つの牡丹の花房、大きんりきんの獅子の勢(以呂波)  
「たいきんりき」大筋力の説。強大筋力。法華經(譬喻品)に「駕以白牛、膚色充潔、形體殊好、有大筋力、行步平正、其疾如風」詠曲・石橋に「牡丹の花房にほひ満ち満ち、大きんりきんの獅子頭、うてやはやせと牡丹芳。大くさかもり 濱の牀几で大きく酒盛きりきり」と飲みかけまよ(女殺)

「大工酒盛」きりきり(きばき)の意と飲み「大工道具 鑿と鑿をいひかけたので、酒盛を大工酒盛と洒落た。そしてこの歌行後の文に、この語の縁で與兵衛が座敷を増築すべきをいふ。これを大きく酒盛とよむは非。

だいいぐれん 八寒の雪に身を埋み、大紅蓮の水に閉ぢられ(女天地)  
「大紅蓮」大紅蓮地獄の略。八寒地獄の一なる鉢持摩地獄を云ふ。罪人この地獄に墮ちれば、酷寒の爲に身體大劈裂して恰も紅蓮花鑿の如くなるよりい。

だいくわい 大塊の間同じ線の窮通かくの如しと知らば(騷物掬)  
「大塊」天地をいふ。莊子・齊物論に「夫大塊噉氣其爲風」とありて、莊子因・楮白秀の註に「按大塊戰戰、地積塊、皆爲地塊、此似指天地間」。

だいくわうち 龍猛大師に轉傳し、大廣智より惠果に至り(以呂波)  
「大廣智」諱を智藏と云ひ、不空金剛と號し第六祖に當る。兩部大教傳來文に「付法傳下云、大廣智不空三藏和上、本諱智藏、號不空金剛、大廣智阿目佉跋日羅、本西域人也。」

だいくわんしよ 京のお役所から此處の代官所へ解狀が附い(大經師)  
「代官所」江戸時代に幕府直轄又は藩主の支配下の年貢・公事・人別等を管理する地方官を代官と云ひ、その役所を代官所と稱した。

だいいげき 中原の大外記執筆にて仰せに從ひ記しける(最明寺筆)  
「大外記」平安朝時代に太政官に屬した官である。内記の作つた詔書を勅へ正して太政官の奏文を作り、先例に照して臨時及び恒例の儀式を發行する官で、文筆に長じ儒官を経た者が之に任せられた。後には清原・中原の二氏が代任せられることになつた。此職は六位相當の官であるが、また年功によつて五位になつた者もあるがと稱した。

だいいげん 晴明は大元三種の大祓(弘徽殿)  
「大元」大元明王をいひ、梵名を阿叱嚩迦(Asura)といふ。大元明王を本尊として國安泰を祈り、または怨敵を降伏する修法を大法と云ふ。寶物集・卷二に、「大元の法を行

うて國母咒誦し給へり。按じるにこの修法は道教とごうがらそつたものであらう。

たいげんたいそ 形に取つては混沌未分、名に取つては大元大素(蠅丸)  
「大元大素」甲子祭天和四年刊、淨瑠璃加賀(正本本)に、「形に取つては混沌未分、名に取つては大元大素、……これを大素と名付けて形の始理の次なり」と見えてゐる。蠅丸のこのあたりの文は甲子祭・第五に見えてゐるの大同小異である。按じるに大元大素は道教の説に基つたものであらう。

たいこ その親父ばかりは七十六であの氣性、午の年に當つたら太鼓打ちやろと笑ひける(百合老)

そ、何してぞ、屋内がお前を尋ねて、太鼓鉦がいらうとしたと言ひければ(水朔日)

「太鼓」太鼓打つは「うまがでんでんうつつ」の説に見よ。

「太鼓鉦」とは、昔は人の行方が不明となつた時、親族や近隣の者どもが太鼓や鉦を鳴して捜索する風習があつた。井原四鶴撰胸算用(元禄五年刊)巻五に「此節季の身ぬけ何て分別能はず、私には道場へ參れ、其跡にて見えぬと歎き出し、近所の衆を頼み、太鼓鉦を叩き響け、これにて夜を明して濟すべし云云」とありてこの圖が載せてある。

「たいこちやう」たいこちやうをも見よ。

たいこ 骨牌には太鼓の二・杯(女補)  
「太鼓」太鼓の二を見よ。杯といへるもコップの畫ある骨牌札の跡である。

たいこちやう 太公伯夷の跡を追ひ(浦島)  
「太公」太公は即ち太公望呂尚をいふ。年老いて困窮し、漁釣して周に至つた(西伯文王)これ蓬ひ連歸つて師とした。武王が殷の紂王を討つて天下を定めたのは、多く太公の謀に出たのである。この文に伯夷とあるは殷の義士である、殷の紂王が滅んで天下周の世となつたので、伯夷周の粟を食ふを恥ぢて首陽山に餓死した。



(鉦・鼓木) (載所用算胸)

たいこうちやう 長袴切袴へいれい  
「退紅丁」任時、傘者などを持つた下司の仕丁の稱である、その着てゐる布の袴の色が退紅であつたからその名がある。花菱三代記に「康暦二年九月二十五日僧刻細着陣……退紅笠持寄人自展。」

だいく 小寺方の大黒と、書は隠して長持に入れた二殿大根や、夜は抱かれて子祭の寝は致すまじ(松風) 南無闍取大明神、短を取らせたび給へ、大黒頼んでどれ取るぞ(孕常盤)

「大黒」僧侶の妻をいふ。和訓栞に「俗に梵婢

を大黒と稱するは、寝まつりの義を取るなるべし。「ねまつり」をも見よ。(一説に、往時僧侶は肉盒も妻帯もせず、戒を守つてゐるやうに見せて、内膳に妻帯せる者は表、向へ妻を出さぬやうにした、よつて大黒天が多くは厨に祭つてあるに喩へて、梵妻を大黒といふ)。昨日波今日能物語に、「或寺に名作の大黒のある由を聞かむと曰ふ。且那申すや、よく存じて候、我等の義はよの人とはかはり候、是非ともと言へば、扱もよく御存じや、誠に數年の旦那、若しかならぬ」とて呼出すを見たれば、年頃は二十ばかりなる言語通達の上き女房を呼出す……。孕常盤に「大黒頼んでどれ取るぞ」とあるは、寺ではおもに梵妻が關の世話をしたものであるよつてかく云うたのである。次條を見よ。

だいいこくてん 井戸へ釣られた大黒天も、好い客路まへた俄子や(雪女)〔大黒天〕七福神の一。其像は狩衣のやうな服を着て楢頭巾を被り、左肩に大袋を背へ右手に打出の小槌を持ち、二つの米俵を背へた上に居る。雪女五枚羽子板のこの文は、井戸へ吊されて處待されたお茶搦遊女も、遂には好い大盡と馴染となつて、金銀を打出してくる福の神となりますますといふ意をかきせたもので、大黒天の米俵にかけて俄子といひ、俄子は沙塵の正月詞で、沙塵を食へば腹が温まるとして、正月頃に勸身として多く用ゐたものである。當時は遊女の客引きが悪いが、其他抱主の氣に入らぬ時は、抱主から頼る處待されたもので、曾我虎が摩(巢林子作)に遊女龜菊の處待されたことを記して「元の起りが龜菊めと様様の折檻、このはか身を縛られ極妻の夜に井の下へ釣下げられし時は、二度までも息絶えしなり」と見えてゐる。

だいいこくまひ 大黒舞、渡つた渡つ

たひかる君の渡つた(症鹽)〔大黒舞〕大黒天の面を被り頭巾を着、その一人袋を持ち、(或は張貫の鎧を持つこともある)、他の一人三味線を持ち、民間の門頭に唄ひ舞うて米騒を賣つた物質の一種であつたが、文政以前既に廢つた渡つた渡つたひか君の渡つた云云は、源氏物語の帖名などを入れて作つた大黒舞の唄である。大黒舞の歌詞は一定しないけれども、ここに云へるもの、及び淋敷座之冠に載せてある大黒舞の唄に「御座つた御座つた福の神を先に立て、大黒殿の御座つた、大黒殿の能には、一に儀を踏まへて、二ににつこり笑つて、三に酒を造つて、四つ世の中良うして、五つ何時もの如くに、六つ無病息災に、七つ何事無うして、八つ屋敷を廣めて、九つ小唄をよぶ立て、十でとうと納まつた、大黒舞を見せいな」とあるよつて其形式の一般が知れる。浪華井眉菴編華鳥安庫(文政三年刊)に、「大黒舞。大黒の面をかぶり唱歌を門頭にうたひ米騒を賣ふ、これらのこと(浪花 歳時雜錄所載)とも今は無くな

大黒舞の名のひきられり。西鶴筆、胸簾用篋



〔舞黒大〕

たいこちよろう 床勤めすの座敷の花、たいこ女郎の合點で、この子諸共厄介し(吉岡染)〔習問女郎〕揚屋茶屋へ招かれて座敷を取持ち、琴三味線、胡弓などを弾き、或は女舞など勤めて、客と床入することはなさなかつたのである。好色一代女巻之二、分里歌女の條に「酒は皆式しけねども、誰氣を付けて扱

搦する人もなく、つい隣りの太鼓女郎にさして日の暮を待ちかね」と見えてゐる。また薄櫻(寛政七年刊)に「たいこ女郎といへるものも、琴三味線胡弓はいも更なり、昔は女舞など勤めたるものなり、享保年中より藝子といへるもの出来たり、これは昔のたいこ女郎といは譯しが、三味線を表に立て置は色をおもとする也、さるによつて美女は昔のたいこ女郎と違ひ、容儀はすまじきなり」と見えてゐるやうに、享保頃から三味線を表に立てて色を賣る藝子ができてからは、昔のやうに色を賣らぬ太鼓女郎は漸次なくなつたのである。

太鼓の二 かるたには太鼓の二、杯には太鼓の一(吉野郡女箱)うんすんかるた四十八枚(一より十二まであつて各四枚づつ、合計四十八枚)の中で、二の四枚の内には、太鼓の形を書き、金泥などで彩色した一枚あつて、之を太鼓二と唱へ、歌五十に當る。「うんすん」を見よ。

\*たいこもち 親代代の刀屋を太鼓持にするのみか(女腹切) 總兵衛めが計ひにてもがりどもを太鼓に附け(遊鹽) 晩には廊で飲みかけ、我等ばたいこ賞正明白なり(冥途飛脚)〔太鼓持〕遊客と遊女との間を幫助して、酒の相手となり座の興をすめる者。習問。大盡を普通より云う大神に寄せて、其太鼓を持つものを義より云う太鼓であらう。色道大盛に「太鼓持といふは傾城賣の客に附従ふ者」云ふ、此名目の起りは紀州雜賀踊り始まる、鐘を打つた者が首に懸て踊る、其中に鐘持たぬ者に太鼓を持せる也、是に因て此名目とす。囃遊樂堂に「太鼓もち古くは太鼓衆といへり、其義は誰神海の能の太鼓打になぞらへ、太夫を心よくせて囃し、大盡の氣に入やうに拍

子たつれば木こといふ、だいいじん」をも見よ。

胎金兩部の峯 役の行者の後を繼ぎ胎金兩部の峯を分け(鐘丸)大和國吉野郡大峯を云ふ。胎金兩部の義については「こんたいたりやう」を見よ。

だいいさい 驚はだらさいの方をよけて云云しを見よ。

\*たいさんぶくろん 泰山府君の祭をなし、祈り求めし陸奥や振指といふ名馬(加増會致)〔泰山府君和訓〕泰山の神にて、我妻彦鳴尊に配合せり、元は道士の祭る神にして鍾民もまた習合せり、古今著聞集に成治二年安房縣奏を召て河原にて泰山府君を祭らせ、自ら南庭に向はせ給ひけりとい見え、東鑑に院御遷修、泰山府君翌日平癒と見えたり。

たいさんぶくろん 唐崎志賀の山櫻、又北國には立山白山たい山ぶくろん(賀古教信)〔泰山府君櫻〕一種。松岡安遠撰櫻品に、「泰山府君」始願齋曰、全く虎尾に同じ、但枝曲折ありて、枝に相つらなつて末にいたり、殊に花貼く、一枝の間斷續して一所に散らず、泰山虎尾一種にして分る。活所翁櫻譜曰、千鐘にて少し赤く、大輪にて紅極の如し、葉は稀々にして赤永日、泰山府君は源平盛衰記に曰く、櫻符中納言此花のさかり數日なき事をかなしむ、泰山府君を祭りて三七日の齡をのべたりとぞ、云云。

だいいしかうのかゆ だいいしかうの粥にあらぬ棒食ひ、はつと一度に逃散つたり(川中島)〔大師講場〕毎年十一月二十一日より二十四日まで、天台宗の諸寺開祖智尊大師の忌を修す。二十四日或は二十三日俗間にて赤小豆

粥を食ひ枯柴を以て箸となす、これを大師講の粥と云ふ。近代世談に、「大師講十一月二十四日。俗家赤大豆粥を煮、是を大師講と云、民間いづれの大師ともわきまへざる人多し、此日は天台智者大師の忌日也。和訓栞に、「十一月二十三日を大師講といひ赤大豆粥を講じ食ふ、天台大師の忌日は二十四日なれど、二十三日滿山の講の終にして、僧侶も早朝紅粥を影前にて食ふより起りたりといへり」。

**だいたいなかたん** 「なかつん」を見よ。

**だいたいしやう** 大聖五十年の御法の聲(羅迦)

〔大聖羅迦を敬つて云ふ。法華經方便品に、「黒日大聖尊と見え、羅迦の尊稱である。〕

**だいたいじやう** 天子大嘗會の前なれば、死罪は宥め助け置く(酒香童子) 既に大永七年新帝大嘗會、悠紀主基の御屏風を書き(反魂香)

〔大嘗會〕天皇位に即かれて天祖及び天神地祇を祭られる大儀である。古は大嘗或は新嘗と云うてその別なかつたが、天武天皇の頃より毎に行はれるを大嘗とし、年毎に行はれるを新嘗とし、その日は十一月下旬と定められた。大嘗には二國を下し、國郡司をして事祭事に供奉せしめるを悠紀主基と云ふ。其供神の大嘗は九月より始めて三月の中に造り了らしめる。故に七月以前位に即かれれば當年事を行ひ、八月以後は明年事を行ふ。その祭儀は兩國司が行つた。悠紀は天神を祀り、主基は地祇を祭るのである。

**だいたいしやく** 上は梵天帝釋、下は四大の文言に(天綱龜)

〔帝釋〕梵名 Sakra-devanam-Indra、初利天の主で善見城に居られ、寶冠を戴き金剛杵を持ち、身に璣珞を飾り温良慈悲の形相を備へ、四天王などを配下につれてみられる。心中天綱龜のこの文に就いては「だいたい」を見よ。

**だいたいじよう** 大乗八軸の骨髄(出世賢湧) 一引引けば千僧供養、二引引けば萬僧供、大乗慈悲の車の檀那(小聖判官)

〔大乗佛果の大聖を求むる道を大乗と云ふ。乗は運載の義である、因を載せて證果に運ぶ乘輿といふ意であつて、佛の教道といふ。大乗は釋尊の説かれた教法の中に於て一切智を求め如來の智を開き、その力用を以て無量無数の衆生を救済して安樂を得しめる教法なるを以て「大乗慈恵」といふ。〕大乗八軸—とは法華經をいふ。八軸を見よ。

**だいたいしよくわん** (大羅冠)

〔大羅冠〕標注羅原抄本別記に「孝徳紀の大化三年に制七色十三階之冠、一曰羅冠、有二大小二階、以羅爲之、以繒裁冠之、繒、天智の三年二月に二十六階とせられたる、大羅小羅と云ふ」と見えたる。天智天皇八年藤原鎌足に、人臣に類例なき冠位第一なる大羅冠を授けられたりよつて、後世大羅冠といへば鎌足のことと思ふやうになつた。古院本には羅冠を大羅冠と書いてあるので、敢て改めぬで置いた所もある。

**だいたいじよだて** 扱(そ)あの鶴鴿を庭來鳴、庭叩、懃教鳥ともいふぞとよよ、今捕へて籠に入れ、たしどけなく(振袖始) 今日より左様の悪戯せばコレ、つめつめするぞとたいじよだて牛若を搔抱(烏帽子折)

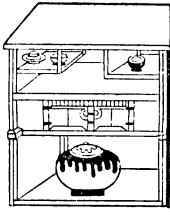
〔たいじやうだて(意欲立)の詔の謝罪證文を書立てさせること。轉じて懃懃すこと。梅窓筆記に「昔意欲と云は今の過證文也。たい(鑰匙) 御身達は大人人手は多(天身)大祿の身分。位高く封祿多き人。だ(大盡) 大盡様のお慰ふ、船の着くまで道行を(大)お給。おれらが様(大)銀遣ふ大盡は嫌ひさうな(會帳帳) 大盡傾城買の上客を云ふ。蓋し大身(前條を見よ)の轉義であつて、寛潤によそほ客なるによつて稱したものであらう。色道大盡に「大巨。傾城買の上客をさしていふ。大臣は天下の三公にして、尤も職重ければ尊敬し、また欺きていふ異名なり。大盡を普通より大神によつて、それに附いてまはる者大鼓持未紅帽御持など云ふ。太真殿 思ひな善路に餓へして太真殿を建立す(國性徳) 楊貴妃の魂の住む處。謡曲楊貴妃に「太真殿と額のうたれたる官あり。白居易の長恨歌に「其中神約多仙子、中有三人字太真、雲膚花貌姿差是。唐林子のこの文は盧曲安宅の勸進帳の文に「思ひを善途に轉じて盧曲安那佛を建立す」とあるを改作したのである。だ(り)ん(さ)の(は)う(の)臺(子)も(し)か(き)や(大經師) (女用訓讀圖彙所載) 〔臺子〕正式の茶の湯に用ゆる四本柱の脚で、風爐茶碗、茶入、水きし等を載せるもの。眞の臺子に就いてはその條を見よ。たいせいろん 大成論。格致論(冷泉節) 大成論慶應孫子の撰し九漢方の醫書で

ある。

**だいたそれる** ヤアヤア大それた事いひますの、酒どころでござらぬ(生玉) 主の印判盗むとばだいそれた此茂兵衛(大經師) 屋内の鍵を盗取り、このだいそれた言譯がでんで(ぞ)そもや立つべきか(今官) 私に身に過ぎてだいそれた望ある者、それさへかな(下された)は(弘敷殿) 大適堪し思はぬ方へ飛び行く義。大いに常軌をはげれる。途轍もない。俚言集覽に、「だ(い)それた(毛吹草)大驚はまじき事のあるるなり、故に喰へば云ふ云へり」。

**だいたいかぐら** 三河の國の町小路、太天神樂珍しと見る人立の賑ひも(日本武尊)

〔太天神樂伊勢大神宮で奏する神樂をいへど、もとは他の神社でも奏したものである。日本武尊吾妻姫のこの文に據ると、皆一様に花笠を被き、神樂乙女は小忌衣を着て鈴を持ち、其他舞に用ひる獅子頭を容れ大唐履に白木綿掛けの、太鼓、笛、鼓を持ち歩いて、それれぞれの役を勤め、饗米役を勤める者もあつて、人から饗米を受けたりものである。人偏訓讀圖彙巻七に「代神樂川伊勢より出づるといへども、伊勢にも限らず、此類は所所にありと見えたり、夫れ神樂といふは神をすすめしめするの舞、乙女が鈴にあはせて除魔の調子神道の大事にて、別に子細ある事とかや、然るを今勸進の代神樂は獅子の乙女もな、只鼓太鼓こきやうたてたてて、太鼓打のつらつ狂人のやうなるを見てうたひ、しかのみならず獅子が立つて扇の手をつかひ、一谷節で舞ふ、いと珍しきことどもなり、岡崎女郎といふ鹿をどりなれば神樂はい



【すいだ】

かが。

**\*たいてん** 禮幣奉幣退轉なく神慮をすしめ奉らん(孕幣)

「退轉修行によつて得た道位を退失して、もとの下に轉落すること。無量壽經に「皆悉到彼國、自致不退轉」。

**だいとうれん** 阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜、大とうれんの降魔の利劍(大龍冠) 斷惡修善の腰當をあくち高にしつかと穿き、大とうれん小とうれん二振の劍十文字にさすままに(女護恩)

「大とうれんも「小とうれん」も名劍の名である。舞の本に「萬戸がその日の装束は神通ゆけのうでがね、さはんやかんすなあて、めら法蓮華のつなぬきはき、忍辱慈悲の鍔を草摺長に着くだして、阿耨多羅三藐三菩提の五枚兜を猪首に着、忍の緒をぞしめたりける。降魔利劍の太刀眞十文字にさすままに、大とうれんといふ劍、あしをながに結んでさげ、田村の草紙に「此鬼は大とうれん小とうれんけんみやうれんと、三つの劍あり、此劍どもを帶する内には日本が寄て攻むるとも討ることはあるまじ」。

**\*だいなし** 聲の命を君にくれべいと、染めしだいなし嫌ひなし、相手えらばず防ぎたり(反魂香) かくてば果てじと、紺のだいなし生簀

「(ぎ)薩摩歌  
奴僕などの着る紺無地で仕立てた筒袖を紺のだいなしといふ。「だいなし」は代無しで、かばりなしの義か。和訓栞に「奴僕的事に紺のだいなしといふは無代の義、かはりなき意なるべし」。傾城反魂香のこの文は、紺のだいなしに、聲無し(無茶音茶で秩序ない意)をいひかけ、薩摩歌のこの文は、紺のだいなし生簀

一枚を生簀(ひたひ)にひかけたのである。**\*だいにちかくわう** 元より大日覺王の分身なりとさとすれば(心五戒魂)

「大日覺王大日如來を云ふ。覺王は如來の異稱である。謠曲並字に「兩無を降命頂禮大日覺王如來、昔伊勢諸伊勢册の尊」。

**大日大聖不動明王**

「とうはうにがうさげんぞ云を見よ。

**だいなねぶつ** は 大和國平群谷大念佛派の庵室(卯月洞)

「大念佛派攝津國平野町の西北隅、大字馬場にある融通念佛宗の本山・大源山大念佛寺の分派。この宗は天治元年良忍上人の開く所。

**\*たいのや** (松風(女夫池)

「對屋」主殿に對する稱である。東なるを一の對といひ、西なるを二の對といふ。その大きは主殿と相等しい。堂上の語家では對の屋といひ、武家では奥の屋と稱した。

**\*だいは** 業さらしめたいげめ、如何な下人下郎でも踏むの蹴るのはせぬこと(女殺) 釋迦に提婆あり、孔子に盜跖あり(津戸三郎)

「提婆(提婆達多(梵名 Devadatta) の略、惡逆の行多く釋尊の法敵であつたが、後遂に改悛して辟支佛となつた。昔て釋尊の親敵であつたによつて惡逆なる者に喩ふ。巢林子の見た提婆達多是釋迦如來誕生會の文中に詳しく書いてある)。

**\*たいはく** 末を見開き都を出でさせ給ひたる御賢徳、吳の泰伯の遺風といはるる王子(捕鳥) 夏仁親王は泰伯仁徳の跡を追ひ、兄を越えて位に即く(持統天皇)

「泰伯(周の太王の長子で、弟に仲雍、季歴があつて、父は位を季歴に譲らうと欲してゐるので、泰伯は父の志を遂げさす爲に、仲雍と共に刑戮に奔り勾吳と號した。そこで父は季歴を立てて國を譲つた。刑戮の民は泰伯を義とし、立てて吳の太伯とした。論語泰伯篇に「子曰、民無得而稱惡。持統天皇歌軍法のこの文に仁徳とあるは仁徳天皇のことで、父神孫天皇は次子寛道稚郎子を寵して太子に立てられた。されば泰伯も仁徳も兄に生れて弟に譲つた人、巢林子が第二の官夏仁親王の、第一の官唐彦の尊に位譲りをなされる例に擧げたのは分當でない。

**だいきき** も お盃ががばつて平の蓋、ありがたがための臺引(雷虎申)

「臺引物(細腰)に添へ出すもので、漆物皿などに菓子などを盛つて出すを云ひ、これは各の持ち歸るものである。

**\*大毘沙門天** (天神記)

多聞天とも云ひ、梵名を Varishamana と云ふ。四天王の一で、須彌北方的守護神である。甲自ら身を堅め舍利者を捧げ、鬼形を踏まへ寶鏢を突いてゐられる。

**だいはやくこつき** 左京の太夫藤孝大びやくこつきの怒をなし、一文字に取つて返し、無二無三に打つて掛か(女夫池)

大白黒鬼で、大白鬼、大黒鬼をいふのであらう。餓鬼紙などに五色の鬼が見えてゐる。爲惠御物語卷六に「五色の鬼ともあつまり、閻魔王の御前に罪人どもを引出し」とある。

**\*たいふ** 帝を始め郷相雲客大夫諸侯に至るまで(大龍冠)

「大古五位をいふ。令義辭に「一位已下五位以上、總稱大夫」と見え、朝儀會集の時、姓名をいはねば五位以上を大夫といふたのが、轉じては専ら五位の稱となつた。

**\*たいふ** 天神大夫の身でもなし、さしい金に氣が觸れた見世女郎のあさましさと(冥途飛脚) 太夫天神に引つり引張られ、それで顔がひきつった西爪のやうな顔なれど(淀松)

「淀松ともいひ、最上位の遊女である。才色すぐれて何不足な程の者がこの位になるで、極めて威勢あつたものである。井原西鶴撰「好色一代男(貞享元年刊)卷之七、勤めの身銀の切實よりはの條に「遊女も太夫は爪も人に切らせば、髪結ぶまでも二人がかり、眉作るも人任せに、腰間の數帳に入るまで引舟、先にあげさせ、腰をかめ、腰をかくる事無く、六七人前後を守護し奉る」とあるを見て、その全盛が知れる。太夫の名目の條に「太夫。これは幕の上の名なり、慶長年中まで遊女とも亂舞仕舞を習ひ、一年に三度づつ四條河原に芝居を構へ、能太夫舞太夫皆傾城とも勧めしなり、尤大人陸歴の御方御見物あり、種種の餘情華麗なる事ども多かりしとなり、さるによつて今日太夫は誰



【夫太】

が家の何といふ大夫が勤むるなどいひしより、自らよき遊女どもの總名となりけるよしと見えてゐる。次條をも見よ。(「中戸」こんじん)の條の畫をも見よ。

\*たいふ まづ鉢植の造り松、すんど流しの一枝は大夫の威勢備はりて(生玉)

〔本末漢官儀に〕秦始皇上封泰山、逢疾風暴雨、頽得抱松樹、因封其樹、爲五木大夫、とある故事によつて「松を大夫といふ、遊女の最上位の大夫を松とも云ふ」この故事から出たのである。前條及び「まづ」を見よ。

\*たいふ 小松内府所勞によつて致仕し給ひ(女護鳥)

〔内府〕内大臣の唐名。拾芥抄卷中、官位唐名部に「内大臣。内丞相。

たいぶつきせる 佛の手の上に寢腹這うて煙草喫むもの俺一人と、所も名に負ふ大佛煙管(三國志)

〔大佛煙管〕京都大佛殿(方廣寺)の邊で造つてゐた煙管。雍州府志七、土窟門下、服器部に「喜世留川俊俗長恩好煙草、吸之筒謂喜世留、是朝鮮所謂烟筒也、今處處製之、然洛下間并大佛邊所造爲本。

太平記講釋 見るかげ細き釣行燈、(大經師) 茶屋が藁屋の軒續き、竹の柱に節込めし、稽古淨瑠璃太平記、琴の連れ歌引替へて(生玉)

太平記講釋とも云ふ。人倫訓蒙圖彙(元祿三年刊)卷七に「太平記論。近世よりはじまれり。太平記よみての物語。あはれ昔は臺の上に著したればこそつり論にもすれ、なまなかかてあれかし、瓶國の涼み池の森の下などにては遊戯きて座を占め、講釋こそお

こりならめ、それを又小首(こびり)傾けて開きある者もあり、と云うてあるやうに物語の類の者であつて、人の群集する所に、遊を敷いて太平記讀をした者もあつたが、又大經師昔條に云へる指節のやうに、釣行燈を掲げて人を寄せた者もあつた。金屋色町番に載せてある繪は、生玉(人倫訓蒙圖彙所載)



〔讀記平太〕



〔釋講記平太〕

\*たいへいらく(女史池) 太平記大盒調の鷗門で、唐土傳來の樂である。武將祇園樂とも鷗門曲とも稱し、鷗門の會の時に項伯項莊の兩人劍舞した狀を携したものと云ふ。

\*たいはんでん 攝州難波津の四天王寺は、これこの大梵天の伽藍を移し(聖徳太子)

〔大梵天〕白界十八天の一であつて、初禪天の第三に位す。大梵天王に任して、一切娑婆世界を統御してゐられる。

だいまち 返事眠たき夜なか聲、二

十三夜の代待や、門の通りはまた四つ(今宮)

〔代待〕だいまち(代察)のつまつた語。代人となつて神佛に參詣し、米錢を乞ふ物質の一種。十三夜の月の深更にのぼるを代待すを二十三夜の代待と云ふ。日記紀事(延寶年中成)正月の條に「毎月毎神社、其身有故障、則侍山伏行人、令詣其社、是謂代察、或曰侍侍庚申待之類亦稱代待、故到其時則代待待者、高聲呼之聲、則入人家而謂米錢。」

だいまんたら 六萬九千三百八十四文字なら、ただこの七字にをさまりし、大まんたらやまたら雪(重井簡)

〔大曼荼羅〕曼荼羅は梵語 Mantra 譯して輪圍具足といひ、一具の法門を圖畫に示したるものに名づける。大日經疏に「曼荼羅是輪圍之義」といひ、また「曼荼羅者名爲曼集。今以如來實功德集在一處……十方世界微塵數差別智印輪圍稱曼、曼輔大日心王、使一切衆生普門進趣、是故說爲曼多羅也」と見えてゐる。重井簡のここにへるは日蓮宗の左右兼て、南無妙法蓮華經を中央に書き、その大左に諸菩薩の名、隅に四天王の名などを書いたもの。重井簡のここに文に「六萬九千三百八十四文字」とあるは法華經の文字の總數「ただこの七字」とあるは七字題目、即ち南無妙法蓮華經をいふ。

\*だいまやうち 大明日の鷹揚に、今日日は最上吉日と(松風)

〔大明日〕昔曆にある語で、これに當る日は最上吉日である。貞享四辰伊勢頭書に「大明日は、古より用ひ來る吉日也、然れどもあくのさばりあらば用ふべからず。」

\*たいめい 弟泉三郎忠衡 不同心によつてたいめいに背き奉る段(源義經)

〔台色〕三公または將軍の命令をいふ。「台は辭源に「台三星名、古以比三公故尊人之詞多用之、云云。」

だいまち 宗旨をかへて一緒に行く、今題目を授けてたも(重井簡)

〔題目〕南無妙法蓮華經をいふ。日蓮宗では妙法蓮華經を一宗教義の題目となすが故に、俗に其宗を題目宗と云ふ。

だいた 大紋の露結んで肩にかけ(世體覺秋)

〔大紋〕大紋の露結んで肩にかけるは家の紋の附けやうと、胸紐、菊紋を組綴にしてある。この服は近古以前にはなく、徳川家定別によれば、諸大夫これを着用し、地布色足らず、家の紋を染出し、下に紺斗目も、華風折烏帽子を被つたのである。

だいまち 三十五日お速夜の志、お同行衆寄集り(女殺) 今宵は父の速夜ぞと、烏帽子装束あらためて(孕常盤)

〔速夜〕神林象器要に「造明日茶毘之夜也」と見えてゐる。俗に佛事を齋む忌日の前夜をいふ。

だいら 大狸卿大江の匡房(偶田川)

大狸の廳の官人罷出で(蛙合戦) 檢非違使の別當大りの廳の官人なり(女殺) 大りの廳より御不齋、只今證跡の實否、己が命の生死二つの境なるぞ(女殺)

〔大狸〕檢非違使の唐名である。「けびあし」を見よ。禮記月令の註に「理治獄官也」と見え、唐六典の註に「理調察理刑獄也」と見えてゐる。「大狸卿」は檢非違使の別當を云

ふ。「大理の體は檢非違使廳を云ふ。拾芥抄・卷中・官位唐名部に「刑部卿大理卿 秋官大理」體原抄に「檢非違使 淨和天皇御宇天長中初置之。異朝最重之官職。昔唐虞代皇即爲之。此云大理。周禮立官之日、大司寇即此任也、後代置大理寺、本朝又以刑部省一爲大理之官、天長年中准唐制置使廳、蓋爲大理寺也、云云。徳川時代に檢非違使廳とははらないが、殊更に昔の罪人を逮捕糾弾する役所の名を借りていうたのである。

だいらくてん 爾が首第六天の犠牲と、えいやつと捻切り(浦島)  
〔第六天〕欲界の第六位にある他化自在天をいふ。他化自在天王は魔王で常に佛道の障礙をなす。三藏法數十七に、「此魔即欲界第六天也、若人勤修勝善、欲超越三界生死、而此天魔爲作障礙、發起種種擾亂之事、令修行人不得成就出世善根、是名天魔」。

\*だいらくとく 三七日がその間大威徳の法なぞ行ひける(嵯峨天皇) 大威徳明王の咒文を唱へましませ(一歳)  
〔大威徳〕大威徳明王は五大明王の一で、西方の守護で六面六臂で獅・輪・杵を持ち、折伏の印を結び水牛に降り、火槍を預うてゐる。大日經疏・六に、「降閻魔(即大威)是文殊菩薩、具大威勢、其身六面六臂六足、是水爲座、面有三目、色如三玄雲、作極忿怒之狀」。

たうかう 「たふかふ」を見よ。  
「たふかのせちを」を見よ。

たうき 同じ處に當歸まで半夏(たうき)と季を重ぬ(陸奥歌)  
〔當歸〕やまぜりとも云ひ、濕地淺水に自生し高さ三尺



〔當歸〕やまぜりとも云ひ、濕地淺水に自生し高さ三尺  
に産す、葉は青、花は小形白色で繖繖形花序に排列す、毒草であるがその根を乾して藥用とする。新撰字鏡に「當歸山山利」とある。この文は當歸に當歸をいひかけたのである。

\*たうぎん 當今甚だ文詞の學に長(給ひ)(用明天皇)  
〔當今〕當代の今上天皇。保元物語・新院御謀叛思召立の條に「當今位に即かせ給ひて」。

たうぐし 唐子番には薩摩、鳥田番には唐櫛と、大和唐土打交ぜて國性述  
〔唐櫛〕齒の細密な櫛櫛を云ふ。もと唐土から傳來したによつてこの稱がある。陸奥傳  
だうぐもち 道具持の槌右衛門一人  
〔道具持〕檜持。遊遊(秋草)古代の武士は弓矢を以て働きし故、武士を弓矢取といひ、一番鎧を以て武功の最上とする事になりし故、鎧を稱して道具といふことになりて、かりそめの出行にも身をはなす鎧を持たざる事になりたる也。

たうかのかせちを 「たふかふ」を見よ。  
「たふかのせちを」を見よ。

兵衛とは思へば近き町つゞき(水朔日)  
ひぢりめん卯月袍及び卯月の調色に出てある人物である。假作人名部「かめ」「よへま」を見よ。  
たうげん こればまた仙術桃源の延命酒(源義經)  
〔桃源〕所謂豐郷である。晋の太元中武陵の漁人がこの豐郷に遊んだことが陶潜の桃花源記に見えてある。事類統編の註に「桃源山在桃源縣今の湖南省常德府の中」西南三十里有桃花源、即陶潜所作桃花源記者也。

たうげん 月額・唐犬額・角額(加増侍)  
〔唐犬額〕承應頃江戸の町版唐犬額兵衛が前額の髪を長く抜き、角を披上げて尖らせてみたので、そのやうな額をした者を唐犬額と云うた。柳亭筆記 四の巻に、「快客僕寶鹿甲戌院翁撰(江戸)唐犬額といふ男達ありし、喧嘩と成ては相手に疵つけずと云ふ事なしとて唐犬額と名付けたり。唐犬額大方男ぶりによく美男なりし、額別して大きく恰好宜しく今稀なり云云とありて、末に頭の名は唐犬右衛門と見えたり。今は梳兵衛といふ、いづれかは云云」。

だうこにち 明日五日は西塞り、六日はだうこ日、七日の卯の刻には必ず必ず一の谷東西の木戸口にて源平の矢合せと(大原問答)  
〔源平日〕故事類苑方技部に、「薰篋日に道虚の日之事。一日六日十二日十八日二十四日、朔日、右者出行探凶也」。

たうかのかせちを 「たふかふ」を見よ。  
「たふかのせちを」を見よ。

なけれど(生玉)  
道成寺は紀伊國日高郡にある古刹である。謡曲道成寺に、道成寺の梵鐘に恨みある女が白帽子となつて現はれ、鐘の供養に詣つて舞を舞うて見せうとして、番僧の眼の間に、舞の鐘恨めしいとて頭頂に手をかけ、引被りて鐘の中に隠れ失たしたといふが、まてまが隠したり道成寺の鐘は無けれどもの意である。そ「何處に隠さん道成寺」と頭頂の文飾である。

\*たうしやうぼん 水汲が汲んで擔うて持つたこの棒、坊主頭を振立てて道正坊の金柄杓、あれあれ撫でて通れば一撫に、はや本腹の伊丹酒(今宮)  
〔道正坊〕寺院の製菓を行銷する賣僧をいひ、藥の効能を誇りに吹聴し、所望の者には代金を金柄杓にて受けて、その藥を與へたるものである。この香もとり破戒僧であるによつて、道正を何處うにかけた道正坊と稱したものであり。當時寺院で製菓したことは、好色山(その條を見よ)なども見えてゐる。好色山した地元藏四回刊卷一、我物賣うて假の聲入の條に、「味噌もちごとちと王子の吸物、道正のげどくに晝のあきまて」とあるも、道正坊の製菓解菓類を服用して醉の醜れたたつたのである。鴨講が袖の果林子跋文(狂言堂如草編在藝古雅志にも出てゐる)に「謂は古きを以てきとす、心は新しきを以て詠ずべきと、その心はいつに心を古風にせよとこそ、道正坊の説法いひ勝の世の中、口も説法の誇大なるをいふたものである。商人職人撰日記(正徳三年刊第二卷、京に抄沙汰の談話の條に「談話に寄つてなく、鉢の師主どももきえ、夜母に笛ひきかづいて迷下り、なほ行

なけれど(生玉)  
道成寺は紀伊國日高郡にある古刹である。謡曲道成寺に、道成寺の梵鐘に恨みある女が白帽子となつて現はれ、鐘の供養に詣つて舞を舞うて見せうとして、番僧の眼の間に、舞の鐘恨めしいとて頭頂に手をかけ、引被りて鐘の中に隠れ失たしたといふが、まてまが隠したり道成寺の鐘は無けれどもの意である。そ「何處に隠さん道成寺」と頭頂の文飾である。

先も何とあらうぞどうせらの坊主とあるぞうせらの坊主は、何爲うに道正坊をいひかけたのである。毘林子のこの文は、道正坊が坊主頭を擡立てて寶乘の効能を吹聴して、金瓶杓で鑑問業の頭上を撫で廻し、所望者から代金を取集め、病者はその藥ではや、痛の本復を、伊丹にいひかけたものである。杓杓で錢を集めることは、風流夢浮橋(元祿十六年刊)卷之四、咄の多飾萬の乗合の條にも、船頭はさあ銘師の心祝ひ船玉の御初禮と、杓杓ふつてあたまた歌よみ、飲むも飲まぬも」とうに七文つづの集錢出しと見えてゐる。錢を集めるに杓杓を以てした例は往々他にもある。

**たうしゆごう**  
 \*傳(聞く)陶朱公は勾踐を伴ひ云云を見よ。  
 \*たうしん 與兵衛様の命な助け道心出家させまして(卯月調色)  
 (道心)菩提心の義。佛道に歸依すること。佛果菩提を求める心を發起した者を道心者といひ、略して道心とも云ふ。

**唐人笠**  
 \*つみとりげの唐人笠を見よ。  
 \*たうせき 孔子に盜跖あり(津戸三郎)この石川五右衛門がとて盗人にならば、異國の盜跖・本朝の熊坂に勝つてこそ本望なれ(吉岡榮)  
 (盜跖)支那上代の大盜賊である。莊子第二十九、盜跖篇に詳記してある。

**たうたう**  
 \*たうたうとして波いろいろたり云云を見よ。  
 \*だうぢやう 鎌田村のお道場へ京のお寺のお下り(冥途飛脚)  
 (道場)聞法修道の聖場。寺院。釋氏教に、「閑宴修進之慶、調之道場、隋慧帝勅通改僧

居名道場)、輔行二に、「今以供佛之慶、名爲道場」。  
**道中雙六** ちつげな馬方が道中雙六とやら、東海道の繪をひろげあちなこととして遊びます(丹波興作)  
 貞享頭に行はれてゐた浮士雙六にならつて作つたもので、江戸に始まり東海道中五十三驛を淵状に畫き、中央を京都とし、兩無諸佛分身の一字つづを六角の各面に打つた格子を振つて一驛から一驛へ進んで行つ。早く京都に達した者を勝とする遊戯である。丹波興作のこの文は、姫君の江戸行と云ふのであるから、道中雙六を京都より始めて江戸で終るやうに逆用したのである。

**唐の帝の花軍** 櫻の吹雪ごぼれ梅、胡蝶の伶倫趣慶頻、唐の帝の花軍  
 (伶倫)移せる如くにて(木領曾我)  
 このことは國性爺合殿第一の文中に毘林子が書いてある。「風流陣を見よ。」

**だうぶく** 火の用心の爲とて革ぐくみの道服、家子郎等に腰兵糧を附けさせ(會稽山)  
 (道服)道路にて塵埃に衣裝を汚さぬ爲に上に着る服で、塵埃であつて羽織の長ひのに似て帯をしない。武家目抄・衣服部十一、胴服は又道服とも書き、この物うちはふりて着るが故に、又の名を羽織といふとありて、廣袖胴服、唐織胴服、華胸服、木綿胴服、雨胸服など懸けてある。

**たうまる** 鶏は唐丸しやむ、かしは。ちやば・小こく・色色(木領曾我)  
 (唐丸)脚巻を云ふ。倭刺菜に、「唐丸とよぶは脚巻なり。冠の大鋸齒の如きを大鋸と呼べり」。  
**だうらく** 北の方をばつたと呪み、やれだうらくめ、うぬめ織子を憎

み様様悪事をたくみしを(三世相)  
 (惡道)道を解して自ら樂しむ義。阿育王經、八に「今已得惡樂」と見えてゐる。轉じてよからぬ遊興に耽ることはいひ、放縱または放蕩の意に云ふ。「説にだうらくは「は」だらく」(墮落)の訛であるといふ。  
**たうりてん** 上る程に切利天の二階、夜晝なしの床入に掛綱棧と異名を受け(堀山遊)  
 (切利)梵語「Tajastriyama」と云ひ、帝釋天王の居所で、欲界の六天の第二にして、地上八萬由旬の高所にある。  
**たうろぎ** 食に飢ふし賊民ども、音に驚きたまりかれ、陣屋陣屋を遣出せる、足はたうろぎ冬の蠅(蛭合歌)  
 (蠅)「たうらう」、または「かまきり」とも云ひ、昆蟲の名。但言集覽に「たうろぎのやうに現。蛭をロギと呼べるは、寢若をオタキ、當麻をタキマと云へる類也、蛭若當、皆留籠三十一轉の字也」。

**たうわ** 寝て見もせいで嫌はんすか、じろり見たり顔付は惚れわなく、親達のいひつけには(雪窓)矢の主の詮議詮議とせりかかれば、蒲殿も當話の返答猶豫して見えけるな(會稽山)  
 (當話)當座の談話。當座に答ふべき挨拶。

**たうなそくめう**  
 \*たうなそくめうを見よ。  
 \*たうな 京烏丸大經師の奥様よう覺えて居ります、田植がお好きでござりました、なんといつ舞ひま

しよかといへば(大經師)  
 (田植)萬歳その條を見よ(田植頭をいふ)。この唄は毘林子作の天鼓に「……上の田も下の田も種に種がまいて一粒萬倍、田をばぞんぶりぞ、ぞんぶりぞ、ぞんぶりぞんぶりぞんぶりぞ、ぞんぶりぞと打植を」とあるは即ちその部分である。田植頭としても何れの萬歳も同一の唄を詠つたものではない。  
**たか** 生きらるるだけ添はるるだけ、高は死ぬると覺悟しや(冥途飛脚) 命惜しい程なら高で身なうつことも無い(生玉心中)  
 (高)成り行き限り。結局。生玉心中のこの文は、命が惜しい程なら命知らずの事もしないから、つまり破滅する事もないとの意。  
**高砂** 江戸の道中二歩では高砂野宮(齋門松)

**たかじやうがしら** 父親は播磨で鷹匠頭の奉公人(永明日)  
 (鷹匠頭)主君の鷹狩の時に使用する鷹犬を飼養して、鷹狩に従ふ役で、組頭・御鷹匠の長である。

**たかせぶね** 二條通の高瀬舟(女腰切)  
 (高瀬舟)和漢船用集五に、「船。城州の高瀬舟伏見より京師に入、則高瀬川也、船高、船横船にて低く平なる者なり、備前に有者此類也、又大井川桂川の舟は其制各別なり云云」。  
**高槻の家の子** 島上郡高槻の家の子、お小姓逢の出頭小栗八彌(女腰)高槻は樺州島上郡高槻三萬六千石。當時の城主は永井兼盛守直朝である。家の子は家臣である。



\*たかて 高手籠手に縛付け、六條河原に引出し(出世景清) とつたとつたと引伏せ引伏せ高手籠手、顔色變ぜず縛られし(大經師)  
〔高手籠手に對する語。臂より上、肩より下の帯の人を嚴し縛り上げる状いふ。〕  
たかもとも  
\*たかひも 二打ち三打ち打つ太刀に、高紐の外れより草摺三間切落され(世繼曾梵)  
〔高紐肩の所にあつて纏の引合せの紐。〕

たかもがり 船屋形に高もがり兵具嚴しき大船を(天智天皇) 船屋形の高もがりばらりばらりと押破り(天智天皇)  
〔高也高き船。葦環に「箇」を「もがり」としてある。〕

たからぶね 今宵は如何した夢がな見た、此方は誠の寶船、舳先が向いた、飲め勢へ(雪女)  
〔寶船) 神の珍寶と七福神を乗せ大船の畫、上に烟文歌「なかきよのおのねふりのみなめさめなのりふねのおとのよきな」と記したもので、節分の夜(或云除夜)これを枕の下に敷いて、吉夢を祈り驅逐を水に流す呪とする。日次紀事(黒川道祐實、延寶年中成)十二月の條に「同(節分)夜祭裏貼(蓋船)白紙、而賜三方及語臣、地下良辰亦奉船、以歌風舞之被底慶、今夜有吉夢、則來祿得福云、若見福夢、則聖朝付是於流水、是謂流福夢、徐徐所船内蓋三種珍寶、故稱寶船、近世是亦撰梓而兒童賣市中、大呼寶船寶船、是又中華紙船之類乎。倭則然、」たからぶねに寶貨を積たる船をえがきて歌あり烟文

也、全游兵制にも載て、とをのねふりを千人共舟と稱せり、歌歌これには長夜の眠の中に十界を流轉する事とす。此を除夜に枕の下にしく、吉夢を見ればつなふ(く歌)といひ、凶夢を見れば流すといふ也、居家必要に、夢乗船吉夢遊主(大富貴)と見えたり、たかんまん 汝が怨念消除微塵たかんまん、東方に降三世、南方に軍茶利夜叉(伊豆日記)  
〔他燃替)不動明王の灌救光(南誦三曼多)羅瓶散摩羅路摩羅薩婆訶也吽但維他燃替の中に梵音である。但維他は堅固、憐愍の種子である。〕

たきぎにはな ふうつかならぬ山人の薪に花とはこれならんを見よ。  
たきぎのう 奈良の都の薪の能のの時よりぞ始まりける(天智天皇)  
〔新能)奈良の興福寺南大門の前の芝生で夜分薪を焚いて能樂を興行し、毎年二月七日から七日間續けた。これを新能と稱へた。日次紀事(黒川道祐實、延寶年中成)二月十七日の條に、「新能。自今日、南都興福寺南大門新能始、元是興福寺夜中法會開、寺僧之度度不堪、春寒、而於門前加燒火、就其光、偶爲能樂、有爲長夜之戲、者、其後爲金春觀世保生金剛四座之樂、近世四座之中、兩座在東武、南都休兩座助之、今七日二座交勤之、八日如之亦是、至九日、則初日、座告衆徒、於若官前施樂、其次夜座勤門能、十日亦次座如此、於此官能終、自三十一日至三十三日、兩座相交勤門能、七日間雨降則十四日臨時勤之。〕

たきぐち 靱胡蘆に的矢一手入るは侍所瀧口の骨法(會稽山)  
〔瀧口) 清涼殿の東北にある瀧澤水の落ちる所に勤仕して、禁中を籠る武士をいひ、駭人所

の下のである。禁秘御抄に、「字多御宇、撰能射者、令候所邊、其所瀧澤水所、落葉也、仍號瀧口候、其所武士稱瀧口、後代爲名。〕  
たきつける こむやくしいあたぶの悪い、こりや御無用にあそばせと、たきつけらるる女心(夕霧)  
〔葉附)おだてる。そそのかす。人を煽動していらだたしめる。元日金盞越に「妬み憎氣は女房の常、ましるに孫にもなる女おきおきが日頃の埋火の、たきつけられてくわつと燃え。〕

\*たきに 仙術・幻術・魔法・邪法・茶吉尼の法(蛙合戦)  
〔茶吉尼)梵語(Tantric)である。茶吉尼、歐祇尼、吽囉爾など書くはその音寫である。夜叉を云ふ。其形赤黒色の鬼鬼であつて、右手に人の手を持ち前に死人仰臥してある。羅琳首義三十五に「茶根尼、梵語、則鬼之能、能魅人與人道者也」と見えてある。我が國では茶吉尼を稻荷と混同してある。荊州豐川稻荷には茶吉尼を祀つたものだといふ。古く著聞集に「知足院殿は大權坊といふ奇驗の僧に陀祇尼の法を修せられるに、夢中に狐の尻尾を得たり。鹽尻に「陀祇尼天は破摩羅の屬にして其種類一ならず、……人の肝膽を喰食す、然るに地獄大土慈悲を以て其相を鬼類に等しくし、之を招して人の爲に傷害を成さざらしめ給ふを本主の陀祇尼」とす。正流の密家に祀る所なり、其鬼類の寶書外相を現するに悉加羅(梵語スリガール)野干となる、季世大方此野干を祀りて陀祇尼と稱し、禱を求め奉るを祈り、或は稻荷と呼で幣帛を捧ぐる族多し。〕

たきもとりう 瀧本流の墨色や(養樂本手帖)  
〔瀧本流)瀧本坊昭乘(松花堂と號す)の書流をいふ。昭乘は攝州堺に生れ、山瀧瀧本坊阿闍梨養樂の弟子となり、師の寂後その跡を繼いだ。書は近衛前久公より入本道を學び、大師様を發願したもので、三藏院近衛信尹、本阿闍梨光悦と共に近世初期の三筆に數へられてゐる。寛永十六年九月十八日五十五歳で寂し。文藝類纂に「山城八幡山瀧本坊昭乘あり、大師流を發願して一流を爲す」とありて、その筆蹟を載せてある。〕

\*たくしかく されそが言傳したぞや、近日一座致したいとたくしかければ(冥途飛脚) まあとんと主様に直に逢うたと思はせ、そして恨の山山お二人になりかけつて、たくしかけたたくしかけ難なくこちの利潤にして、追付け迎の乗物お二人ながらお屋形へ、迎取つて抱いて寝て可愛がることのお返事(抱符)  
〔たぐりかく)手觸掛を「たくしかく」とも云ひ、「たぐりこむ(手觸掛)を「たくしこむ」といふ類である。くりかけくりかけといふ。續けざまにいひかける「たぐりかく」といふ語は、女殺地獄に「與兵衛がたぐりかけて打つ泥砂、出合拍子に馬上の武士の袷上まで、ざつとかかる時」の運」と見えてゐる。〕

\*たくたく お腹の痞たくたくと、胸に躍るを摩り下げ(狸懸)  
心配して心臓の鼓動のたくたくさま。どきどき。(「たくたく」は副詞であるが、胸のたくつき堪へ兼ね」とある「たくつき」は動悸の意に用ひたる成名詞である。〕

たくくなは 抱帯を解いて我子を脊にしつかと締付け、海士のたくくなは

ゆふ禪(天神記) 手繰若しき蚕のた  
く(な)は(蚕)の呼聲(松風)

〔精細〕楮の皮をなへる繩であつて、漁人の  
網に附ける。増補和訓栞に「たくなは。た  
くはたへとも云ひて楮といふ木也、今からぞと  
呼て紙にすく物也、いしへは其木の皮にて  
布を織、且繩などにもせし也、網などの繩に  
は今も用うと也、其繩をたぐ繩といへり」

\*たけはつ 托鉢の道心者(つち)は  
つちと門に立つ(堀川波歌)

〔托鉢〕鉢を捧げて信者に施惠を乞ふ義。沙門  
が施物を乞ふこと。正字通に、「托何ノ拓、  
手承(托)物也」

啄木 流に響く御溝水、流泉啄木  
の曲をあやつるとは斯る、ことと  
や(蛙合歌)

たぐぼく 胸はだくだくだぐぼくの  
坂のしたへとわかれける(舟波與作)

高低。でくぼく、現今遼州あたりにて、高低  
を「たぐぼく」と云ふ。和訓栞に「たぐぼく。  
一説に高卑の轉語なり、組のさま高卑あるを  
めて「たぐぼく」といふ、今も道路のたかびくをた  
ぐぼく」といふ。當世大和言葉上に、「路の  
高低なる事をたぐりぼくり、たぐぼくなとい  
ふは如何云云。」

\*たぐる 上の町から番太郎がくる  
火用心(天網島)

歌をする。しはぶく、現今も福山市地方にて、  
歌をするを「たぐる」と云ふ。越谷秀真撰「物  
類呼巻之五、言語の部に「歌をせくと開東  
て「たぐる」といふ、關西にてせきをせたる」と云  
ふ、播磨邊にて歌をたぐる」と云ふ。按ずる  
に日本書紀神代上「吐」を「たぐる」と讀ん

である。歌をするを云ふのはその意を轉じた  
ものである。異林子作大鶴冠、第二に「在天  
悲しきたまられず、兩眼に涙をたぐり、已れ  
願殺してくれんと願ひ出しし」とある。たぐ  
りる吐の義から轉じて流し出しの意である。

たけかき 竹笠は名も高橋の紋  
所(五人兄弟)



〔竹笠〕紋所の名。夜討曾我、舞の本で寛永古  
活字版に、「た  
けかきはたかは  
し」とあり  
て次の紋繪が載  
せてある。

たけがは 紅梅、竹河、橋姫(淀雄)

\*たけじさいてん 他化自在天の妹  
背には顔と顔とを見るばかり(五人  
兄弟) 雲にも登れ地にも入れ、非  
想非非想他化自在六欲天も高から  
ず(日本武尊)

\*竹田 「こは竹田か云云」を見よ。  
〔他化自在天〕欲界の第六天であつて、他の樂  
事を假して自己の樂とするが故にこの名がある  
。此處に住する天皇を魔王と云ふ。

竹取の翁が娘 袖の縫物綾錦高燈  
臺に輝きて、金泥砂子竹取の翁が  
娘の彩色も光を恥づるばかりなり  
(會稽州)

竹取の翁が竹の筒の中から拾うて育てた赫耶  
姫を云ふ。この女光雅明彩姿絶妙にして、  
多くの人達に戀慕されたが遂に月世界に歸つ  
た。詳しくは竹取物語について見よ。曾我會  
稽上のこの文は、前文に「竹取の間に由で  
給へば」とありて、竹取の間にて竹取物語の

赫耶姫を畫いてある座敷であるによつて、か  
くは云うたのである。

\*たけなが 小枕すてて丈長も捻元  
結に大髻(雪女)

〔丈長〕春巻のやうな厚い紙をたんで作つた  
ひらもとゆひ。和訓栞に「たけなが。長長の  
義、女の髪に用る紙をいへり、即ちひらもと  
ゆひ也。」

丈も連れず唯一騎(振袖始)

馬の丈は四尺を定尺とし、これを馬丈とい  
ふ。これより一寸大なるを「き」といひ、八  
寸大なるを「八き」といふ。「き」は刻の義  
である。

竹に雀は陸奥  
の五十四郡の總政  
所伊達と(五人兄弟)



\*たけのこがさ 竹子  
笠の紐強く(會稽州)

〔竹子笠〕菊皮を編んで作つた被笠。錦文流  
す傾城八花形に、木夫が定めて道中が一際  
すべれて見事にある。そんならわしは下男、  
やがて傘をさしかけませうぞと、竹子笠を初  
にかけり。

に立寄り給へかし(槍狩)

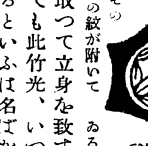
〔竹葉酒の異名。故實名目に「昔竹葉を三本  
の木のうちつほの雨水に漬して酒を作り出し  
り、その三本の木は杉の木なり、今酒屋に出せ  
る出すは此故なり、又酒をみきといふは三本  
の木のみならず、竹葉といふも是なり。尺椀双  
魚の註に「釀酒法を以て其中に雜ふ、極めて  
清潔なり、故に酒を調つて竹葉となすと。」

竹の紋付く道行 心やばらか 餓頭  
や、菓子に火繩に番附と、賣る聲  
にまで節籠る、竹の紋付く道行の、  
本を召せ召せ目せき笠(二枚袖)

〔竹の紋〕竹本筑後條の紋である。表紙に竹  
本筑後條の紋が附いてある

道行の本を云ふこと

其本は異林子作の用明  
天皇暇人徳の山道の道  
行のある本であつて、そ  
う輸入細字本の表紙にこの紋が附いて ある。



たけみつ 好い主取つて立身を致す  
もの、何をいうても此竹光、いつ  
か此無念さなはるといふ(ば名ば)  
り、心は木刀削走ちやと(雪女)

〔竹光〕竹を削つて刀身に代へたもの、即ち竹  
刀をいふ。蓋し古來の刀工に行光、國光、正  
光、貞光、兼光などと、光の附いた名の者が  
多かつたから、その光を取つて竹刀を竹光と  
いうたのである。「たけみつ」は轉じて「たけ  
みち」といふ。風流御前二代曾我實永六年  
刊(五之巻)に「仔細らしう二腰はさせど恥し  
ながら竹道でござる」とありて「竹道」に「た  
けみち」と振假名を附けてある。

\*たけもと この夏此處の芝居へ竹  
本の弟子が下つて重井筒を語つ  
た(淀雄)

〔竹本〕竹本筑後様をさす。その條を見よ。この文に「この夏」とあるは、寶永五年の夏である。外題年鑑（明和五年刊）寶永五年の條に「夏竹本座奈良（行く）」とある。

**竹本頼母** 淨瑠璃にせまいか、禿

ども一寸住つて竹本頼母様借つて來い、いや先に鬢附買ふで越後町の扇屋（行かん）したげな（冥途飛脚）の扇屋筑後様の高弟で、美聲を以て聞え九瑠璃齋りである、正徳五年に國性爺合戦の九仙山を語つて好評を得た。其家は大阪新町西の大門口にあつて、髪附香油などの化粧品を出してゐた。そして彼は竹本座に勤める暇には、摺屋色茶屋に招かれて淨瑠璃を語つてゐたのであるから、冥途飛脚のこの文に「竹本頼母様借つて來い」と云へるも情味深い文である。「鬢附買ふ」と聞きまじつたがと云ふ文も、竹本頼母の店を買物したことが知れるし、頼母が遊女等と知合が多かつたことも知れる。錦文流瑠璃當世乙女鑑（寶永三年刊）巻第四に、「ここに竹本頼母と申す淨瑠璃太夫此里に住居致し候へば、太鼓持ちと相申すにはあらねど、あなたこなた御座鋪を相勤め候へば、淨瑠璃は年來筑後が膝をはなれずゆかき勤むる者に候へば、ふしは先生がくつきまでをのがさず、聲に愛あつて淨瑠璃美しう語りなせ、どこやら筑後よりまい所あり、うたよく唄ひ三味線少し仕り、ぞつこ心底奇麗になれつゝ、今の世の座敷持ち、申さう所はなれども酒のならぬが残念、然しなごは是は淨瑠璃と食とおして養ひ申すべし。

**竹本筑後様**（用明天皇職人鑑）

攝津天王寺村の農家に生れ、淨瑠璃を清水理兵衛に學び、また加賀様に従ひ、貞享二年大阪道頓堀の芝居に竹本義太夫と名乗り、幕

竹本頼母——たちがん

に袴袂の内に笹の丸を被所し、世戀曾我を語り、舞太夫節、掃屋節、角太夫節、文節節等の諸流の長所を採つて、新作の一流を玉成した。貞享三年浪林子の芝居、出世披露を請ひ得て興行した。これぞ浪林子が義太夫の爲に筆を揮つたはじりである。元祿十四年五十一歳の時筑後様藤原博教の稱を授けし、その祝儀としての披露興行に體丸を語つた。彼が正徳四年六十四歳で逝去するまで、その生涯語つたものは大方浪林子の作である。實に義太夫が練磨の美音と門左衛門が神韻飄逸の妙文と相待つて、大阪藝術の權威に立つた。その墓は大坂市南區天王寺大道羅願寺内にあつて、元祿十日義太夫と題し、劍に正徳甲午年九月十日と刻してある。

**たけれんじ** 「れんじ」を見よ。

**たじぎぬ** 「いだじぎぬ」を見よ。

**\*たじやうごふ** それ一河の舟に棹の縁と聞く（卯月調色）妻と結び君と呼ぶ結縁は他生劫、頼もし嬉し有難や（釋迦）蚤蚊蟻蠅を殺しても其罪あたかも他生劫と説かぜられた（天鼓）

**たしんつう** 千日が間多身通の法を行ひし故、親子の血筋の悲しさは、魔法に引かれ、兩眼兩耳鼻と舌、六人（の倅と顯はれ（動物通））

六神道の一なる他心通を多身通に轉用して、一身が許多の身に化現する意にいうたもので、通とは作用自在で無礙なるをいふ。（或は十通の中の六に、多身を現すといふがあれど、聖經の中に見當らない。）

**たすき** 時代の金櫛・鶴菱・たすき、花尻・窠に（霞）（丹波興作）

**たつき** つくづく物を按ずるに、タ

タキ我は劔の金性の刃にかかると、束か（大經師）

**たたまき** 進ぜうか進ぜまいかと

〔歌〕殿は乞食のわざであつて、室町時代に、編頭中を被り誦經を腰に付けて、何事かしやべりながら手で胸を敲き、人より施物を乞うて歩いたものである。元祿頃の殿は正月や彼岸などに、扇子で拍子を取りながら歌を詠ひ、物を賣つて歩いたのである。その詠ふ歌は大經師廣幡のこの文に「つくづく物を按ずるに、我は那の金性の刃にかかると約束か、わしは土性盛の土云云」と見え、卯月紅葉に「よしや地獄（墮つとも、たとへ佛に）なるとも、タタキ必ず契りこめ屋町、本町筋の軒深く、思ひみたる中なれば、埋まは同じ安土（人倫訓蒙圖數所觀）」



〔きゝた〕

りけり」とあるやうな歌洒落歌も詠つたのである。  
**たたまくをし** 池の蓮の初開き、水に錦を織榮えて、たたまくをしき花盛り（福田川）

**たたまき** 進ぜうか進ぜまいかと

〔語釋〕「たむ」と「借し」との二活用語が通つて、複合語をなす時に「たたまくをし」に延べたので、「見まくしほし」など云ふもこの類である。古今集、雜上部に、「思ふどちまどみせる夜はから錦、たたまくをしき物にぞありける」

**たたみざん** 進ぜうか進ぜまいかと

〔疊算置いて見て（重井筒）〕 女心のあはぬもば涙片手に疊算、あふもあはぬも不思議とは思ひながらも、半ならんは九條の町におはせよ（吉野忠信）

〔疊算〕どうせうかと思案して決せぬとき、煙管などを疊の上に投げて疊の目を數へ、その數の丁（偶數であるか半（奇數）であるかによつて、心の惑をいづれかに定めるのである。伊達婆五人男（西園與志撰寶永四年刊）巻二に「疊算まで幾度も丁にあたるは瀬川が身のひしげざん」

**たちかけのんこ** 打揃うたる血氣盛り、立掛のんこのあたまがち、裾はおるすの勝手見まひ（菅庚申）

立掛籠のこんこ結をいふ、「たちかけのんこ」たてかけ」といふ。その條を見よ。「のんこ」にも見え、ここの文は、意氣な結髪で頭ばかりは見事だとの意。

**たちがん** 十二の捻、十一の投、立がん（立眼）相撲道の手の名で、約、十二手の立眼である。換ひ秘要抄に、約十二手を擧げて立眼

たちぎき

居眠(いみね)一舞(いちま)など見えてゐる。

たちぎき

〔立酒(たちざけ)〕 眞火雜記(まいたざい)・庶具部(しよこぶ)に、「たちぎきともおもがいたすけとも云ふは、櫛(かみ)のかがみのまきおもがいたす通す所のあるかねをいふなり、櫛の名所なり。然るに今は其所につくる絲の櫛をたちぎきともおもがいたすけとも云ふは、非なる也。ふさをばたちぎきのふさ、おもがいたすけのふさとも云ふべし。古は無之の物なり、古昔にも古き繪にも見え、近代理(だいり)伊(い)之物なり。古き繪にはおもがいの結びあまりのふさ計を畫きたり。」

たちぎみ

世渡(よわた)る習として(卯月(うづき)祀(まつり))

たちぎき

〔立君(たちぎみ)〕 總集(そうしゆ)をいふ。夜除路傍(よのぞろみぎ)に立つて色を賣(う)るからの名である。職人(しやく)盡歌合(しやくじんかあひ)三十番(さんじゆばん)に「背の間(せのま)にえりあまるる立君(たちぎみ)の、五條(ごじやう)わたり月(つき)ひとり見る」とあるから室町(むろまち)時代(たいてい)から起つた語であらう。「せうか(せい)」を見よ。

たちぎき

〔立酒(たちざけ)〕 今(いま)冥土(みやうぢ)の門出(かどで)と、これを限(かぎ)の立酒(たちざけ)や、梅屋町(うめやまち)にぞ迷(まよ)ひ行く(ゆく)〔重井(しげい)節(ふし)〕 つぐも受(う)くるも立酒(たちざけ)をお吉(おきち)見付(みつけ)て、そりや何ぞ忌(よ)め忌(よ)め、子供(こども)ば頑(ごん)足(あし)がな(な)いにもせ、立酒(たちざけ)飲んで誰(たれ)を野送(のよ)り、ああ氣味(きゐ)わる(わる)〔女殺(おんなころ)〕

たちぎき

〔立酒(たちざけ)〕 葬送(そうじやう)の立止(たちど)しに立ちながら酒を飲んで行く風習(ふうじゆ)があつた、されば立酒(たちざけ)は葬式(そうしき)に聯想(れんさう)してこれを思(おも)はるのである。傾城(かぢやう)播磨石(はりまいし)寶永(ほいうゑい)四年刊(しゆねん)刊(かん)巻五(まきご)に「此(こゝ)一通(いつつう)り開(ひら)け、さつぱりと舞(ま)をさへあまざつた、此(こゝ)斗檮(とちゆ)で祝(いわ)ひて通(とお)す、ふづまりな行(な)りためまつたら、厨外(くわい)ながらあ立酒(たちざけ)を飲(の)ましてくれう」と見えたる、これは殺すことを立酒と魂曲(たまがき)にいうたのである。

たちつけ

〔殺者(ころしや)おもに旅行(りよく)の時に著(つ)き、股引(かひき)に似た袴(はかま)で、その裾(すそ)は脚半(かあし)に仕立(しだ)したものである。守貞遺稿(しゆてんいこ)第十(じゆ)二(に)篇(へん)男眼(おんなめ)の部に「殺附(ころしづ)形(かぢやう)無(な)松(まつ)と同(どう)にして、背面(そへ)に小(こ)ハセ五六(ごろ)箇(か)を敷(敷)けて紐(ひも)を用(もち)みず、……近世(きんせい)も武士(ぶし)の旅行(りよく)火場(かぢやう)毎(ごと)に襦袢(じゆばん)及(およ)び立付(たちつけ)とも稱(せう)に用(もち)し、又(また)平日(ふつじつ)も用(もち)に非(ず)也。市民(しみん)も火場(かぢやう)には稱(せう)に用(もち)し、其他(ほか)は用(もち)みず。書(か)言(ごん)字(じ)老用集(らうりよくしゆ)・眼(め)意物(いぶつ)に「殺者(ころしや)」。

たちはき

〔帶刀(たてはき)〕 東宮坊(とうきやうぼう)の武官(ぶくわん)である。その長官(ちやうくわん)を帶刀先生(たてはきせんせい)と云ふ。木曾(きそ)義仲(よしなかつ)の父(ちち)は帶刀先生(たてはきせんせい)義賢(よしかげ)である。

たちはな

〔撫花(なはな)〕 蓮花(れんが)の形(かたち)を紋(もん)にしたもの。

たちみ

〔立身(たちみ)〕 立ちかかつ身(み)がまへ(まへ)へすること。

たちま

〔毒衣(どくえ)〕 人(ひと)死(し)して冥土(みやうぢ)に逝(い)き、三途川(さんずがわ)を渡(わた)る時にその川(がわ)のほとりに毒衣(どくえ)と云(い)ふ魂(たま)ありて、亡者(むしや)の衣(え)を一枚(まい)奪(うば)ふと云(い)ふ。三途川(さんずがわ)「三途川(さんずがわ)を見よ。」



たつかゆみ

〔愛着(あいぢやく)の矢先(やせん)となり、悉(ことごと)く身にたつか引(ひ)かかるとる苦患(くゑん)は添臥(そへふ)の(井筒(いでとう))〕

たつかり

〔手束(てづか)〕 伊勢(いせ)伊弉(いそ)御(み)弁(べん)貞(ぢゆう)隨(じゆ)筆(ひで)に「たつかりと云ふ事、手束(てづか)弓(ゆみ)と書(か)くも、手束(てづか)とは手(て)にぎる事也、只手(て)に取る弓(ゆみ)といふ事也。」こゝの文は

たつき

〔たつき〕 〓(あ)らる。

たつき

〔手着(てぢやく)〕 手(て)密所(ひそか所)・とりつき所(とりつきしよ) 古今集(こゑんしゆ)春(はる)の部に「をちこちのたつきを知らぬ山中(やまなか)に、おぼつかなくもぶよ高(たか)かな。」「また修羅道(しゆらみち)にをちこちの云(い)ふ、その條(ぢやう)を見よ。」

たつき

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつぱい

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつき

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつき

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつき

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつき

〔天(あま)に必ずきつと迎(むか)へる(日本武尊(やマトりかみ))〕 八時(はつじ)頃に當(あ)る。「んま」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

たつた

〔逆(さか)り〕 五逆(ごぎやく)の逆多(さか)・八歳(はつさい)の龍(りゆう)なれるをいふ。」「だく」を見よ。

達業自慢といひそな男(天細島) おさるはさすがに茶人の妻、物数奇もよく氣もだてに、三人の子の親でもきやしや骨細の生れ付き(糞糞三)御供の上下残りなく鏝の上の伊達小袖(冷泉節) 老若男女の花咲きて、足をそらそら空吹く風に散らぬ色香の伊達参り(安敷) ここそ浮世のたての大木戸(淀塵)

「たて」伊達は昔信子なども立であつて、「伊達」をする「伊達」などいふ伊達もこの義よりできた語で、「男を立てる」などいふ「立」も同じ語である。「たて」いふ語の古く見えたるは、古今著聞集(建長六年の序)が「見えたり法師のことを云へるくだりに」その心だてで「たて」しと見えてゐる。「立」は華奢の意にもなりて、容姿を飾ひまた衣裳を着飾ることにもいふ。傾城富士見る里(狂言本)元祿十四年刊(第一)に、「伊達なる傾城をお好きなする喜六様なれば、俺がやうなうたうな風はお氣に入るまい」とある如く、遊女は華奢な形振をするによつて、伊達風というて遊女姿即ち師團の意にも用ゐてゐる。淀塵(世帯)に「たての大木戸」とあるは新町遊廓の大門口を云うたのである。

**たてかけ** 御髪の御用なら、大銀杏、中銀杏、立かけ、投げかけ、千松留(加増曾扶) 髪は銀杏か立掛かお好き次第の選俗と(五人兄弟)

「立掛」「たちかけ」といひ、男子結髪の名で、髻の大きな髻。男色十寸髻(貞享四年成)若衆の事を記せる條に「髪を油にすまきぬれば、おのれと底髻あるものなり……たてかけの大髻、髻の大きなは似合たると似合ぬ人あり」

たてかけ——たのもし

**たてがみかつら** 此顔では若衆鬘も似合ふまじ、立髪鬘はなほのこ(吉野思信)

「立髪鬘」髪居などで青年に扮粧する時被り、前髪を立てて結うた鬘。

**たてしとみ** 好き時節とたてしとみの蔭によ(用明天皇)

「立番板敷の類であつて葎の如く作つたもの。外から室内の見えぬやうに殿舎の裏子の前などに立ておいたものである。源氏物語、野分等の巻に「ひはだ瓦所」所の立葎、透垣などやうのみだりかはれ云云」。

**たてつく** 鬼神といはれたる王子(用明天皇) 親が子なたばかれば子は親にたてつく(重安)、繪言にたてつくは扱ばうめめば朝敵かとい(ば)蟻丸

「盾突(坂合ふ)。對抗す。反抗す。櫻曾扶女時宗(享保七年刊)三之巻に、「遊興は外になして人を打擲してもどりを切り、是をなぐまみにして所の迷惑度なれども、人皆恐れてたてつく者なく、くるわ四筋を一ぱいにありき」。

**たてあぼし** (用明天皇)

「立烏帽子」立烏帽子は烏帽子の本體である。折らない烏帽子であつて、髻が八寸の高きなれば横の廣さも八寸ある。これを被つて前方を押込んだのであつたが、後世になつては堅く盗固めて作り、前方を押込んだやうにさび(烏帽子の縁をよつて作る)。

**たどろたどろ** だんぶだんぶと泣めば、雲に影落ちて月も袂を上り坂、たどろたどろの御難行(釋迦)

「たどろたどろ」の轉。行く道おぼつかなくて尋ね迷ふ貌。

**たなねるし** 忠兵衛が身代の棚卸したてくれろ(冥途飛脚)

「棚卸」正月の初めに商家にて店に陳列してある商品を取卸して調査すること。轉じて、人の弱點までも悉く述べ立てること。滑稽雜談(正徳三年成)正月之部上にて「店卸。是又商賣の繁盛(賑)きたる物の負數を多少分際何によらず減旨に改る事也」。

**たなつもの** 王化に潤ふ秋津民、つさきぬしつものたなつ物、をさまる千代のしろししか(や)睡塵(天皇) 庭に五つものたなつ物(宵度申)

種つ物の義。穀物をいふ。和訓栞に「たなつもの。神代紀に水田種子をよみ、又穀をよめり、種つもの義なり」。「五つものたなつもの」をも見よ。

**たなしふね** 心一つぞこがれ行く棚なし舟の、夜となく晝ともわかでおむつがり(根元曾扶) 漕げや漕げたなし小舟、釣人のいさりする狐川(西玉母)

「棚なし舟」の兩舷に亘して舟子の船んで漕ぐところの棚板の無い小舟、即ち踏立板の設なき舟。「棚なし舟」とあるは、棚なし舟の如くに意。

**たなはた** いかさまこれば七夕の、年に一度をこらへかれ、又取越しの天の川(用明天皇)

「七夕初秋の頃に牽牛織女の二星が銀河の邊に現れる。支那の小説に、毎年七月七日の夜の一度のみのこ二星が交會する」と云ふに據つたもので、織女星を神代の天の棚板姫神に附會し、牽牛星は男なれば彦星と稱したたのである。古今集秋上の部にも「こひこひて逢ふ夜はこよひの天の川、霧たち渡り明けずもあらなむ」など見えてゐる。

**たぬきのさわり** 冢の焼皮、熊の掌、狸の澤渡、猿の木取(天神記)

「狸澤渡狸の手足をいふ。庭訓往來五月の文に「熊掌。狸澤渡。猿木取云云」とありて永井如瓶の譯解に「熊掌。狸澤渡。猿木取、いづれも皆手足の事也」と見えてゐる。

**たねがしま** 舟手には國崩、大砲、小銃、種子島、毒をさしたる鐵を揃(國性爺後日)

「種子島」昔時用ゐた小銃の名。和訓栞に「たねがしま。鐵炮の小さきをいふは、兩艘の半羅叔舎と云ふも此島に來りて始めて鐵炮の術を傳へたるより此名なるなり」。

**たのしめる** 佐太の煮賣を見ることも、廓でならぬたのしめ野に(淀塵) 吾妻が調出されて嫁入する途に、佐太の煮賣を見ることも、これは廓にては見られない。樂しみに、野をいひかけたのである。そして誰の占野の意をもきかされたのである。「佐太」(點野)は地名部について見よ。

**たのみ** 今日ば内方のおまん様(御祝言の頼みか来る(薩摩歌))

「御」女重寶記(元祿十五年刊)二に「縁組首尾して男の方より女の方へいひこはす事、俗にこれをたのみをつかはすといふ」と見えである。結納のことである。

**たのもし** 中に頼母子の懸錢(七十四文あつたもので、定めて狗寶に掴まれたでござらう、正眞の天狗頼母子ぢやと、ぶつこき言ふも道理なり(萬年草) ええ天狗掴ま(頼母子の銀吐出させすもの(團圓)) 頼母子講の略。朋輩同志あせて講をつく

り、各人鏡を出し合せて、他日これを頼みなどで分配し、或は講中の慰み又は合力救済の費にあてられるのである。「たのもし」は頼の義で、即ち合力救済の意であらう。(一説に「たのもし」は「たのもしろ(田物代)で、貧富を平等に配合せ、百姓互に五人組を作り、田物代を出し合せて、その鏡を村役場に預置き、貧困に苦しむ者ある時に村役場からその預立鏡の中からも出して與へた。このこと建武式目の中にも見え、頼母子の稱はこれより起つたといふ。)

「頼母子の銀吐きさすもの」は「頼母子の銀を吐き出さすもの」の義である。「天狗頼母子」をも見よ。

**\*頼もしし** 正八幡の告ぞかし、頼もしし頼みあり(女談島)

形容詞の終止形頼もししを頼もししというたやうな例は昔にも尠くない。基俊集に「家苞にさのみな折りを櫻花山の思はむことやさしし」。源平盛衰記に「美しし美しし」河原は食ひたし命は惜しし」などは皆この類である。

**\*たばね** この心清町一町のたばねをする年寄(博多) おもて手代助右衛門、此家のたばね綿の小紋の羽織(大經師)

〔東木〕丹後官津の城主阿部對馬守正盛の親隨様。

〔たばね取締〕「たばね綿」は取締の意に東綿をいひかけたのである。



**\*たばねき** 駕籠は東木・丹後の宮津(薩摩歌)

〔東木〕丹後官津の城主阿部對馬守正盛の親隨様。

**\*たばふ** 只一つある装束とてたばふて、平素は着給はぬ(大磯虎)

蓋ふ。惜しみ蓋ふ。この語現今福山市あたりでは「たまふ」といひ、着ずに簞笥に蓋へて置くといふを、着ずに簞笥へたまうて置くといふ。

ふ。和訓栞に「たばふ」俗語なり、たくはふの略なるべし、海道記に命をたばふしと見え、盛衰記に身をたばへと見えたり、口語にたばひ置なま(いへり)。

**\*踏歌の節會** 我等は踏歌の節會の役人十六夜と申す舞姫なるが(天神記)

昔時禁中では行はれた公事の一である。正月十五日、六日、京中の男女の多く歌ふ者を召して、年始の祝詞を作つて歌舞を奏せしむる儀式であつて、その歌曲の終毎に必ず重ねて萬年阿良禮・萬年阿良禮と唱へたのち、つて阿良禮走とも云ふ。この日天皇皇樂殿に御して宴を待從以上に賜はるを以て踏歌の節會と云ふ。男舞人の奏するは正月十五日で男踏歌といひ、女舞人の奏するは正月十六日で女踏歌といふ。後世になつては女踏歌のみ行はれた。

**\*たふかふ** 波たふかふと橋柱ゆするが如く寄せけるにぞ(十二段)

〔旬句〕波の重なる貌海賦に「蓋旬句而相逐」。たまかに育て上げ(生玉) 心のたまかさことうさ(歌念佛) 商賣方にも精を出し、心ざまもたまかなゆゑ(曾根橋)

〔手細〕の義。まめやか。こまかに心を用ふること。轉じて締約の意にも。江島其積撰、風流曲三味線二之卷に、「びいどの徳利の中へわくを入れたたまかな細工などして、世の響きふりは住みふき今の境界と思つたばかりにして。俳言集覽に、「たまか。俗に纏巻をいふ。凡てこまかに心を用ふるを云、訓義未詳。

**\*たまかづら** 二百餘人の玉蔓、夕々に産出するてなし金の擱取

り(酒呑童子)

〔玉蔓〕和漢三國書に「玉蔓。其蔓引地。葉似忍多葉而厚。春開小花。色青綠可愛。と見えたる。玉蔓この木の木に這かるとやうに、夜な夜な客かへて相手となる遊女を云ふ。古今集・無歌四の部に、「玉かづら這ふ木あたまになりぬれば、絶えぬ心の纏しげも木」と見えたる。

**\*たまきはる** あの釜で煮殺すは慘や不便と、にえかへる油と共にたまきはる、和國に見なれぬ刑罰なり(唐船歌) こがれ来る涙のたまきはる、我も古郷のゆかしき(一心五戒魂)

〔魂〕「たまきはる」の義。よつて以て命内世などの語にかゝる枕詞である。萬葉集・卷十一に、「たまきはる命者棄」など見えてある。この文は魂極まるの義よりして、命の果てる意に云ひなしたのである。

**\*たまぎる** 北の方わつとたまぎり手を合せ(賀古教信) 心たまぎりや夜ざとなつて、身だまんじりともせない(博多) 根木も折れよとどうどうと踏み、衣引のくれば兩人は、あつと魂ぎり起上り(用明天皇)

眞逆様に跳返せば乗つたる老女はこぼれ落ち、あつとばかりに魂ぎる體(鹿が廳)

「たまぎる」といふ。「たまぎる(魂消)のつまつた語。突然烈しい恐怖に襲はれて、心魂の消入るを云ふ。また轉じて驚愕仰天するを云ふ。次條をも見よ。

**\*たままて** さび粘つて一獻酌まん、夕露のたままて釣竿打ばへ(大磯虎)

搦綱又手であらう。魚をすくひ捕へる具。手許運り前方廣く綱を張つて柄を附けたもの。すくひたま。搦綱はたまてたまといふ。和訓栞に「たま。臨臨語に魚をくむ物也といへり。搦綱をいひ、たまる義なり、よつてすくひたまといひ。

**\*たまほの** ちんの煙が三筋立つ、四筋に別れ玉銚の、これより辰巳奈良街道安穩 讃岐の浦へと玉銚の、御有様こそあはれなれ(大經冠)

三里に足らぬ玉銚も、草鞋凍り足(一之支鳥帽子折)

「玉銚の」は、玉銚の「み(身)といふを「みち」(道)にかけていふ枕詞である。萬葉集・卷一に、「玉銚の道ゆきくらしきなど見えてある。轉じて、「玉銚」を道との意に云ふ。

**\*玉蟲拾ふ** 牛若は道うとくも逃げ入らず、玉蟲拾ひ玉銚の、露を飼うてぞおほはします(伊勢集)

じつと居るもきまり悪いに、それを動かす動作である。巢林子作今川了俊に、「仲秋大きに赤面し、塵を掃つておほはせしが」と云ひ、同人作・堀山姫に「小糸はそらき顔、鼻根で塵取取玉帯、紙屑拾ひて居たりけり」と云へる「塵を掃る」紙屑拾ふも玉蟲拾ふと同じ類の動作である。

**\*たみくさ** 治る國や民草の、なほその榮え衰へを纏丸 太平の世

の民草の、女子がちなる花鳥  
の(賀古教信)

「民草」民は草の(あはれ)として衆多なる如けれ  
ばいふ。養生、青人草などいふもこの義で  
ある。

\*ためしもの 首を斬られ手足を  
もがれ、ためし物になるとして  
(大經師)

「試物刀」の利鈍を試す爲に斬られる者(い)  
の(賀古教信)の條を見よ。

\*たも 好い女郎衆のしやつて足本  
が軽いの、おいてたも(丹波與作)  
なんぞやつてたもとい(ば)(重井簡)

「給はれ」をつめて「ためれ」といひ、略して  
「たも」といふ。呉れなき。下され。

\*たもとゆり 戀草千草思ひ草、眺め  
らるるも眺むるも、同じ色なる袂  
百合(生玉)

「袂百合」和漢三才圖會卷百〇二、百合の條に、  
「袂百合」花正白色、葩厚大而上、或橫垂、  
最可愛、本出琉球深山溪谷間、難得之人  
採種下、一株久扶、復種上、故名。袂百合  
珍重之。菓林子のこの文は、袂百合を柏屋  
さの美鏡に喩ふ。

\*たもりめす むぞうか者とも思しや  
つてたもりめすと思へば(女護色)

「九まはり召すの義。下され。この言葉は現  
今も鹿兒島地方で一般に用ゐられてゐる。

\*たもん 死出の山にば馬となり、多  
開、持國に口取られ(孕常盤)

「多開」多開天をいふ。「四天王」を見よ。  
だら 大脚臍指(ばらし)(持統天皇)  
「だんばら(其條を見よ)の略。斷臍は常字。  
太郎冠者 まづ太郎冠者を呼出し

て申付けうと存する(松風)  
この文は狂言、細根に據つたもので、太郎冠者  
は狂福のワキである。

\*だらごゑ 奥の客がだら聲にて、  
りやさがば何してぢや(生玉)

だらだらと締りのない聲「だらだらだらつき  
聲」といふてゐる。(心中天網島上之巻に、  
「花車様さらば、後に青葉の澄し物と、口合た  
らたら立ち歸る」とある。たらたら「たらこ  
も、「だら立ち歸る」の「だら」も濁點の有無の相違は  
あれど、同じ義で、締りのない出放題の口合  
を言うて立ち歸る意である。

\*たらじゆ 七多羅御を見よ。

\*たらちす 御袋様も殿様もたらしつ  
此つつ遊ばせども、ごうでもい  
ぢやとおむつがり(丹波與作)

足らしめる義。欲情を満しめてだます。賤し  
騙す。俳言集覽に「たらちす」娼妓の客を諷く  
を云、令足の義、轉じて諷く事になれるなり、  
欲情を満しめて諷くなり。

\*たらち 谷の木の實をあさると  
て、たらちの猿の子を引連れて  
(今川了俊) たらちめの家苞にこそ  
なすめれと(十二段)

「たらし」(足)の轉である。「たらちめ」は「た  
らし」の轉であつて、「ね」は垂根、伊呂波な  
ど「ね」と同じ語で、美稱である、赤子を育  
て日月を足らし人となす義で、萬葉頃までは  
母の乳調として用ゐられたが、後世は「たら  
ちめ」に母または親の意に用ゐる。

\*だらに だだ引けや手手に千手の  
陀羅尼(用明天皇)

「陀羅尼」梵語(Dharani)である。佛菩薩の  
説かれた咒語であつて、萬徳を包蔵する眞寶  
の語であつて、これを定まれば眞言と

も云ふ。千手の陀羅尼をも見よ。  
だらり 團栗の辻を出れば建仁  
寺、だらりが鳴るぞだらつくまい  
ぞ(女腹切)

洛東建仁寺の東鐘樓にある梵鐘を百八聲陀羅  
尼鐘といひ、この鐘の鳴るを世に「建仁寺の  
だらりが鳴る」といふなり。「だらり」は陀羅尼  
鐘のことであるが、「だらり」とは言はなから  
「だらり」と訛つていつたものである。この鐘  
を夜中に撞いていたのである。好色訓蒙圖彙  
(貞享三年刊)に「叩二つある。建仁寺のだら  
りにふけ行く夜半をうらみ」と見え、池西言  
水撰(京日記寛享四年刊)に「雪や舞陀羅尼  
鐘敲う。花卯木とありて、「陀羅尼鐘」に「だ  
らり」と振假名してあり、元祿曾伏、卷一に  
「建仁寺の夜半鐘」とありて、「夜半鐘」  
語實永七年刊卷二に「六角の鐘につづき  
建仁寺のだらりも鳴納まり」と見え、秋里雜  
島撰、地名所圖會卷二、東山建仁禪寺の條に、  
「此鐘毎夜子の刻より數九十聲撞くなり、晨  
朝には十八聲なり、合せて百八撞たり、昔は  
陀羅尼經を誦して撞き、此鐘の音を稱して  
建仁寺の陀羅尼といふ」と見え、昔を稱し  
たり。さすが引取の言ひも習はぬ駕

籠昇詞、なり下りたり。だり。ばん  
どう、いつかががれん。きり。がれ  
ん、駕籠やろいとぞ涙ぐむ(西玉母)

四をいひ、駕籠昇などの者の體語。鬼園小説  
に、一をソク、二をブリ、三をキリ、四をダ  
リ、五をガレン、六をネジ、七をサイナ、八  
をバンドウといふ由見えてゐる。「きり」の  
條をも見よ。

たりきほんぐわん 源空法然上人他  
力本願とて口唱念佛を勧め給ひ、  
普く衆生を御濟度ある(大原出雲)

(他力本願)他力は自力に對する語で、阿彌陀  
佛の本願力である。阿彌陀佛の四十八誓願  
(四十八串願の誓願)の條を見よ。中の念佛  
往生佛を他力の玉本願といふ。法然上人は口  
唱念佛を以て往生本願とされ、その撰述の  
選擇本願念佛集に「願院如來不以此餘行爲  
往生本願、唯以念佛爲往生本願」と見え  
てゐる。

たれる あんまりよい月影に額たれ  
うと思つて(重井簡)

「垂」たるの訛。剃る。「ひたひたれ」を見よ。  
「たれ」は搦む義。しなやかにてゐる。源氏語  
語帶木の卷に「人がたれたをきたるに強  
き心をしめてはたれれば」。

\*たれん 十四五端の廻船に、船頭舟子  
は襦袍着て(博多)

「たれん」反また段とも書き、帆の幅を數へる語  
で、端一枚の幅即ち三尺をいふ。この文に  
「十四五端」とあるは、木綿帆の幅が三尺の十  
四五倍なるをいふ。和漢三才圖會卷三十四、  
船綱、帆の條に「故、帆用蓋延、中古用  
紗、近年用木綿、以綾線、利、縫之、令し不  
裂、凡木綿三幅爲一端」云云。

\*だん 三段ばかりは足も立つ、次第  
次第に波は高し底深し(最明寺殿)

「段」今昔物語に載つてゐる語を宇治拾遺物語  
に記して、今昔物語に「だん」とあるを宇治拾遺  
物語に「段」と、その時代語に書き換へてある  
に據れば、「段」は即ち「だん」で、「段」は「一  
だん」の長さである。(段の長さ)に就ては古來語  
説あれども、いづれも臆説に過ぎぬ。菓林子  
作最明寺殿上人上座に、「引致をくは(腰帶  
を解いて、引締め引締め締る間に、廣綱す  
つと乗抜けて、佐佐木が家の骨法御免あれと

いふままに、ざんぶと打入り半町ばかり先に進んで泳がせける」と書いてある。これは源平盛衰記巻三十五高綱宇治河を渡る事の條に「馬を留め懸踏張り立上り、弓の弦を口に啣へ腹帯を解いて引縮め引縮め締める間に、高綱さつと打渡して二段ばかり先立つたり」とあるに據つたものである。されば果林子は「二段ばかりは」半町ばかりと心得たので、即ち一段は十五間程の距離と見たのであらう。

\*たんにい 難波の祖師の名號 探幽の觀世音(三世相)

〔探幽〕野探幽は、漢の諸畫家東山時代の名流の畫士土佐風の畫をも練習研學して一新機軸を出し、狩野家中興の祖と稱せられた。其歿したのは延寶二年十月七日で行年七十三。

\*だんぎ 了海坊の談義に打込み (甞庚申) おれらが談義まゐりして一文投げる鐵錢さ(重井尚)

〔談義〕對談法義といふことで、佛法を説じて正道を示すをいふ。佛教の法話。説教。談義。〔鐵錢〕は佛教の法話を聽聞に寄附すること。たんにい 大綱かけて引上げよ、たんにい(唐船断) 投惠銀子で、銀錢を與へるの意か、但し支那書に合はねば出鱈目と見るべきであらう。支那人はこの意に給銀子などといふ。

斷金の契 (雪女) 斷金の契ともいふ。至つて親密な交をいふ。易駢語上傳に「二人同心、其利斷金。」

\*たんにくわ 心ばかりは早瀬川、急来る痰火に息切れて(賀古教信) せきのぼる痰火は胸に滞り、病症重くぞ見えにける(百合若)

〔痰火〕熱氣ありて痰の烈しく出ること。及び

その病。たんにい 短檠の光も細く更くる夜の、川風寒く霜みりて(天綱龜)

〔短檠〕短檠の光も細く更くる夜の。短檠集・卷之中に短檠と出てゐるから除燈書からあつたものである。

\*たんにご づらや端午の紙幟(生玉) 端午五月初五日の節句をいふ。俳諧談時記纂草に「端午。五月初五日端午の節、端は初なり。午は古へ五字と通用す、しかるときは五月初の五日の謂なり。」

だんご 「やれゆのだんご云々」を見よ。

\*たんにせい 感應これ誠あり、一つの験を見せ給へ、と、丹誠を抽んで若葉を幣の手に向山拜禱天皇 丹誠無二のこころざし(國性齋)

〔丹誠〕赤心のまこと。真心。太平記卷四、大塔宮熊野落の條に「一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける、丹誠無二の細勤、感應なごあらざらんと、神慮も暗に計られたり。」

\*たんにせい 丹青の器量古今に長じ (反魂香)

〔丹青〕彩色した畫。繪畫。漢書・蘇武傳に「雖古竹帛所載丹青所畫、何以過乎卿」。丹青の器量とは繪畫の才能をいふ。

\*だんせん だんせん(五入兄弟) 兒玉黨(五入兄弟)

〔舞〕の本で、寛永活(古字版)に「うちありて次の紋治が罷せてある。小玉丸」とありて次の紋治が罷せてある。

\*たんだ 主従はたんだ三人なるが、人少でも泊めるかといへば(西玉母) 願志を燃して直に地獄へたんだ(走り(饑饉天皇))



〔んせんだ〕

\*たんだい 我安房の國を巡りし時、彼の者落人となつて隠れしを、房州のたんだいに申付け、成敗を遂げさせたり(最明寺殿)

〔探幽〕武家時代に重要な地方を總管せしめる爲に、幕府から補任した要職である。探幽の稱は釋家の探題から移つたものである。釋家にて探題といふは、宣旨を蒙つて課誡及第の可否を辨じし職で、碩學の僧の任ぜられたのである。武家が政務を裁決すること恰も釋家の探題が課誡を判斷するに似てゐるによつて、探題の稱が武家のこの重職の名に付けられたのである。探題には九州探題、長門探題(又云中國探題、奥州探題、羽州探題、六波羅探題(執權を探題職とも云うた)があつた。但し房州には探題があつたことを聞かねば、果林子が房州のたんだいといへるは、安房の領主の意であらう。

たんでき たんできの奇特を見せんと、算木を奪取り座をならべ(二心五戒魂) 推參ながら山伏の祈念より、妾が家の祕密を、走り者道切り、たんでき當る梓弓、矢より早く現はし申さん(用文章) なほたんできの法を以て帝位に登り、かの姫を後宮に立てん(用明天皇)

〔端的〕觀明、まああつた。朱子語類に「卓然自得無所汚染、此其所見、必有端的處」。易林本節用集に「端的」。本朝櫻陰比事(元祿二年刊卷五)に「移氣の人の條に「かの山伏を召され、此度の行力たんできなる所殊勝千萬に存する。」

\*たんと 紙治様のゆ内からたんと客の吟味にあはゆして、何處へもむさとは送らぬ(天綱龜) 定めし此喉を切るかたが、たんと痛いでござんしよの(天綱龜) 何やらわけの悪い事ありて、たんと撲たれさんした(曾根崎)

〔たん〕は足。の義。たんととはたたりぬとの約であらう。充分に。深山に。甚だ。「たぬ」たんのう(完分) 足りぬの轉した語である。好色一代男巻八、情のかけろくの條にたんとぬの垂が顔つ可笑し。この語現今も用ひらる。

\*だんな 拾をせうと思ひ堺筋で加賀一且旦那の名だいで買がかる(曾根崎) 講中皆お揃ひ旦那寺もとうお出で、御夫婦ながら只今と、言捨てて歸るそそき旦那坊主(甞庚申) とばし立て(卯月調色) 十夜の内にとほし立て(卯月調色)

死んだ者は佛に成るといひますが、定かいな、それを身が知ることか、且旦那坊主にお問なされ(天綱龜) 旦那、旦那、旦那など布敷。蓋し梵語(〇千日)の音寫である。布敷と譯す。布は普、施は捨の義である。普く布施することをいひ、布施する人をいふ。轉じて主人をいふ。「旦那寺」とは菩提寺をいふ。この文は、旦那寺の和尚と云ふを略して旦那寺と云ふのである。「旦那勝り」とは主人よりも勝つて偉らぬ動作をなすこと。「旦那坊主」は旦那寺の坊主をいふ。

\*だんない それそれ此處(一)ざんす、こなさん逢うてもだんないか

それそれ此處(一)ざんす、こなさん逢うてもだんないか



(生主) 門を明けたば誰そ、だんないものと由兵衛上り口までつかつかと(今宵)

\*だんじのう (大事無)の説。差支ない。現今も関西地方で普通に用ゐられ、「だんないは大阪詞、大事ないことなり、改て云へば大事おませんともいふ」

\*だんのう 関部と縁を切りて下さればたれば、心にとんのうなさる程のことば何卒致さう(心三河白道) 二人一所に居る上ばだんのうではあるまいか(淀壁)

「だんぬ(足)が轉じて「足ん」となり、「だん」のうと延びた轉成名詞である。(堪能と書くは常字。満足。十分。井原西鶴撰「日本永代藏」卷四、仕合の種を詩鏡の條に「あまたの講まひりはあれども、終にこの乞食のたんのうする程鏡とらせし人なかりき」

たんばいろ びつくりびつくり唇うるみたんばいろ、瘡病のやうにわななき聲(千正犬)

「體紫色顔色が瘡癩のやうに蒼くなつたこと」

だんはう いやそれまでもなし、即ち我等が檀方なり(融大臣)

たんばいろ—ちからがは

であるが、遂に廣く(か)命の意にいふ語となつた。いたし船(延寶七年刊)西鶴の句に「引張の月の行方丹波越。都風船(延寶九年刊)三巻に、「女の身として芝居元をすると大きななるは、女にあひて、わが物は是非なし人の物までおひちらし、女の丹波越いと移りかなり」

だんびら 二見事なだんびら臍、此足にて逃げたらば天竺までも一飛ならん(津戸三郎) 大切先のだんびらもの、身ばかり買うていなれば後家鞆に極つた(女腹切) 宇多の國行二尺ばかりのだんびら物(善門松)

「だんびら(徒廣)の轉訛である。「だんびら」は即ち「だん」の轉訛である。「だん」は廣い刀。武家名目抄「刀劍部十七に「たひらは即ちたひらのは略したるにて、双の幅の廣きをたひらひろといひ、狭きをたひらせま」といふ。後代だんびら物といふことあるは、たひらひろの略語なり」

だんぶくろ 天の戸袋だんぶくろ、くわつと開けた初日の色(電女)

「だにぶくろ(駄荷袋)の音便。布製の大きな袋」

たんぼ 集禮も書付あるならば代物遣らんと言ひければ、心得たんぼをつけ生囊・鹽貝に花鑿、書出いたし算盤に暫く時こそ移りけれ(水朔日)

「湯婆の唐音である。大阪詞に銚盆をいひ、酒を温める器。俳言集覽に「たんぼ 大阪詞、酒のちろり也。水朔日のこの文は「心得た」

「だんまつま」をひかけたのである。  
\*だんまつま 斷末魔の四苦八苦(會根樹)

「斷末魔」(梵語 Marmachid)である。Marmachid は Marmachid と chid との合字であつて、Marmachid は支節の義で、chid は切斷する義である。Marmachid を斷つて末魔と音寫し、chid の義の斷と合して斷末魔となつた語で、この世から氣息を引取る最期、即ち生から死に移る間絶の眞際をいふ語である。國宗論に「復害人心者、臨終受斷末魔苦」。俱舍論十に、「於三身中一有異支節、備便致死、是謂末魔」

だんりん 越後より下總の檀林へ通る所化の僧(最明寺殿)

「檀林」檀羅林の略。佛教の學問所を云ふ。寺院。

ち

ちいみ これでもじを殺すかや、ちいみも今はいつぱりと(大經師)

「血忌」大雜書魂永十一年刊に、「血忌は人馬の血をとらず、針灸にいむ。曆日講釋に「物の命をとり針灸治等には至つて強し」。この文は、大經師に據ある曆上の語を用ゐて文を飾つた唐づきの祭文である。

ちうげんぜんのかうたい 「ちうげんぜんのかうたいを見よ。」

ちうごふ 撫つとも盡きぬ大石の、住切の末西域の皇帝、民主王より八萬餘代(釋迦)

に至る間をいひ、世界の成立し住持される時間である。「じふさう」を見よ。

ちうごふ ちうごふのり 我朝のふかきにてちえだつねのりといひし人、忝くも勅命にて筆を染めしと承る(大掛物)

「千枝常則」源氏物語の中に見える繪師である。源氏物語・須磨の巻に、「この頃の上手にすめる千枝常則など召して、作り給仕らまつらせばやと心もとながらへり」とありて細流に「千枝常則皆繪師也」と見えたる。

\*ちかごろ 近頃面目なけれど人も人も聞いてたへ(二枚船)

「近頃」近頃頃の義。轉じて「まこと(誠)にしてちう程の意にちよ」

ちかひ 二人は救され我一人誓の網にも果てし、菩薩の大慈大悲にも分隔てのありけるか(女護身)

直に成佛得脱の、誓の網島心中と(天網色) 肩に笈摺同行二人、誓の船に任せ行(縁暎天)

「誓佛菩薩の四弘誓願、即ち衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無盡誓願學、佛道無上誓願成をいふ。佛菩薩が苦海に没在せる諸の衆生を救濟難致し給ふこの誓願を網に喩へて「誓の網」といひ、また生死の苦海を渡つて涅槃の彼岸に到らしめるを、船に喩へて「誓の船」といふ。諸曲・後境に「非常も同じ大誓なるに、一人誓の網にめれて沈み果てなん事はらかに。玉葉和歌集卷十九、釋教歌の部に「世にこゆる誓の船を頼むかな、苦しき海に身は沈めども」

三三七